
サイデリアル～光り輝く者たち～

大朋堂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サイデリアル〜光り輝く者たち〜

【Nコード】

N6019A

【作者名】

大朋堂

【あらすじ】

舞台は近未来。人々は、ドームの中で生活していた。ドームはG・A・G・B・G・C・G・Dと4つの地域に分けられ、政府により住む場所を決められていた。スラム街であるGDには反政府組織レジスタンスが活動している。主人公・春菜は、人体実験を行なっている「黒の組織」に襲われた。その場に偶然居合わせた男に助けられる。しかし、男はレジスタンスの一員だった。春菜は家族に害を及ぼすのを阻止し、また自らが黒の組織から身を隠す為に、レジスタンスに入ることとなる。春菜は、戸惑いながらもレジスタンスで成長していく。

第一章

「私には信じるものがあり、信じてくれる人がいる。私の意志は必ず受け継がれる」

言葉の主は、最期まで前を向いていた。目には強い意志が灯っていた。どんなに苦境に立たされても、その瞳から光が奪われることはないだろう。

春菜はその光景も、その言葉も、その一瞬を永遠に忘れることはないだろう……。

時は戻る。歴史としてはほんの一瞬、けれども人の一生としては貴重で貴い時間。

ある者が見上る。そこにはただ白い空間が広がっているだけだった。東から西へ決まった時刻に決まった軌道を描いて、人工太陽が移動する。この空間に四季はない。すべてが人工物だ。

人々は一度過去を失い、陽のあたる場所を失った。現在、人類は自らを作り出したボールの中で生活を送っていた。すでに外の世界と言う概念は希薄になっている。

ただ、外は氷河期で人の住める状況では、ないとだけ、発表されていた。時々、天井から何かが当たっているような轟音が聞こえるのは、そのためだろう。

ボール内は4つの地域に分けられている。グレードA（GA）地域には、各政府機関と大企業が置かれている。GB地域は、社会的地位のある者が住む高級住宅街。GC地域は、一般住宅街。その他の地域はGD地域とされ、無法地域になる。GA・GB・GCとGDには、空間的にも制度的にも大きな隔たりがあり、政府はGDに対して『人（すなわち人権保持者）』の存在を認めていない。

政府は、アメとムチを使い分け厳しい管理の下に人々を置いてい

た。G AからG Cについても、査証なしでは互いの地域を行き来することは許されない。

ドーム内の人口はおよそ1000万人である。G Bに居住地を構えるのは400万人で、その内G A出勤者は200万人ほどである。200万人のうち軍関係者が10万人。G Cには600万人が生活する。G CからG Aに勤務するものはいない。G Aに行くには、G Bに居住している必要がある。G Dの人口は1万人と推測されている。六年間の義務教育は、G B・G Cそれぞれの地域で行なわれる。それ以上の高等教育機関はすべてG Aにおかれていた。

369年。ボール内で人々が生活をして4世紀目も半ばを過ぎていた。政府の統治には矛盾があり、問題も多い。それでも表面的には安定を保っていた。

だが、徐々にこの安定にも亀裂が現れ広がっている。G Dでは反政府組織が生まれ、軍隊の出勤する事態が近年増えていた。世界は変革の時期を迎えつつあった。

どんな時代だろうと、時間は誰にとっても平等に流れる。ボールの中で生活する大半の人は、目の前にある現実と向き合って、日々を懸命に生きていた。ニュースから流れる、不穏な動きを自分の生活の一部として考えるのは難しい。

朝起きて、学校や仕事に向う。夜は、明日のことを考えて眠る。『退屈』を感じる事があるが、それが『当たり前』だった。

G Cの通りを家路に向かい歩いている彼女もその一人だった。

彼女の名前は松門春菜。G Cに生まれた。

彼女には不思議と他人に強い印象を与える魅力があった。人の集まる場では、期せずして中心におり、自分よりも周りのことを配慮する気配りができた。

彼女の家庭は決して裕福とは言えず、高等教育を受けるのは、通常不可能だった。

高等教育を受ける為には試験を受けなくてはいけない。その試験を受けるにはかなりの費用が必要になる。その上、合格した後の学費も、義務教育の10倍必要であった。G Cで高等教育に進む者は、全体の一割に満たない。その九割が、学校指定推薦で、奨学金の給付を受けている者である。第一は全額免除で、第二・第三が半額免除である。G Cの平均年収を考えると、第一でなければほとんどの学生が高等教育を受けるのは難しい状況であった。

学校第一指定推薦を獲得する為には、本人の努力はもちろん、担任教師の協力が不可欠だ。半端な気持ちで口に出す事が許されない神聖な特権であった。

ついに彼女は、学校第一指定推薦を獲得した。彼女が生まれて初めてG Aに入ったのは、名誉ある奨学生の身分だった。

G Aの雰囲気は独特である。G Aに入る事ができるのは、2種類の人種に集約する事ができた。金のある者か。能力のある者かである。そんな環境の中、彼女は努力を惜しまなかった。

そして、あつという間に三年が過ぎた。彼女は更に学問の道を歩むことが決まった。彼女の努力が形になったのだ。

今は2月の終わり、春休みで実家に帰る途中であった。うつとうしい髪を後ろでまとめ、人の多い通りをすぎた。彼女は荷物片手に、見慣れてはいるが久しぶりに歩く道を、足早に駆け抜ける。

「今日の御飯は何かしら？」

持っている鞆の中は、大半が家族へのお土産である。奨学生は、成績によって研究費を給付される。それを少しずつ貯めて、家族へのお土産を買ったのだ。

G Aは競争の激しい世界である。クラスメートは仲間であると同時にライバルであった。向上心のない人間は自然淘汰される環境であった。

彼女はG Aに身を置くことに不満は全くなかった。だが、どこかで何か大切なものをなくしているのではないかという不安があった。

印象的な風が通り過ぎる……。

身長は180cm前後であろうか。髪の色はブラウン、前髪にウエーブが少しかかっている。服は地味なものを着ていたが、それが飾りのない男の魅力を更に際立たせているように見えた。間違いない、誰が見ても眉目秀麗な美男子である。その容貌は他人を惹き付けるのに十分だった。

だが、彼女をひきつけたのは、ただ外見が他より秀でているからではなかった。すれ違ったときに一瞬見た瞳。明らかに彼女が今まで見てきた人間の瞳とは違っていた。何か強い信念を持っているような、深遠を湛えた瞳。

春菜は、人間は顔ではないと思っている。それでも、思わず見とれてしまうほどだ。そして、手の力が一瞬緩んでしまった。

荷物が、バサバサと音をたてて、落ちていった。

「うわぁー」

袋に入れただけの荷物は、中身が転がっていく。その内の一つは、男の足に当たって、止まった。

慌てて荷物をかき集める私に男は近づいてきた。

「大丈夫ですか？」

「はい。すみません」

春菜は、顔が熱くなるのを感じた。

気づくと、通りに人が誰もいない。男はおもむろに立ち上がった。表情が緊張している。

「まずいな……」

春菜は荷物を置いて、周りを見渡した。

「まずいって、どういうことですか？」

「黒の軍です」

「黒の軍？」

「説明している時間はなさそうです」

春菜は、男の視線の先を追った。黒尽くめの男達がゆっくりと近づいてくる。春菜は、頭をフル回転し、『黒の軍』というキーワード

ドを検索した

「人間を実験台にするって言う、あの組織ですか？」

「良くご存知ですね」

黒の軍はもともとは政府医療チームだった。人工臓器開発をしていたが、民間機関と統合され、人工人間開発を始めた。それに対し、倫理的問題から世論が反発し、表舞台から姿を消したのだ。

より優秀な人工人間をつくる為に、人を実験台にするという、噂だけを残して。

ドカツ

春菜は、首の部分から発生した鋭い痛みが電気のような体を感じるのを感じた。地面に膝が着き、目の前が暗転していく……。

真っ白い部屋には二人しかない。質素だが管理の行き届いた部屋には、新鮮な空気に満ちていた。一人はベッドの上で横になり、もう一人はその横で恐縮したように立っていた。

「いつも言っているが、二人の時にそういう態度は止めてくれと言っているだろう。私は、サイレスの上に立ちたいと思っているわけではない。ただ、必要だから、役割を演じているだけだ」

ベッドから起き上がり男とも女ともつかぬ声が寂しげにサイレスと呼ばれた男にかけられた。顔は青白く、健康を損なっている事は一目瞭然だが、目にはサイレスと同様、いやそれ以上に、強く人を惹きつける光が灯っている。声も力強く、朗々と響いた。

「彼女を連れてくるつもりはありませんでした」

サイレスはベッドの横に立ち自嘲気味に言った。

「別に気にしなくていい。黒がねらっているような人材だ。あいつらは、自己満足の組織だから、一般に迷惑を掛ける事はない。だが、一度目をつけたなら、何度でもねらうだろう。家に送り届けたところで、逃げ切ることは不可能だ。それで、あの子については、どうするつもりだ」

サイレスは、表情を変えずに答える。

「規定通りにします」

「そうだな。それしかないな。あー考えてみたら、君ずっと立っているじゃないか。座りなよ。サイレスはいつでも対等な立場で意見を交わしたいのに」

ベッドからのりだし、イスを引き寄せ「さあどうぞ」と言うポーズをとった。サイレスはブラウンの前髪に手を当てた。少し居心地悪く座ろうとしたが、何かを思い出したようにまた立ち上がる。

「何か飲み物を入れましょうか」

サイレスの問いに、オツという顔をして答える。

「気を使うなよ。贅沢を言えば、アール 그레이が飲みたいな。サイレスが入れてくれるお茶は本当においしいけど、私から言つと命令しているみたいだな」

サイレスは軽くうなずくだけで呼びかけに返事をせず、お茶を入れる準備のため部屋を出た。表情こそ変えないが、これが彼の照れ隠しである。

サイレスが部屋を出たのを確認してから呟いた。

「あと何回君の入れてくれたお茶を飲む事ができるだろう」

部屋にひとり残された者の独り言である。誰にも届くことなく、空気に溶け込んで消えた。

第二章

彼女が目を覚ました場所は暗闇だった。とっさに起きたのか、夢の続きを見ているのか分からない。それが現実と分かったのは、全身を覆った鈍い痛みがせいだった。小窓もない部屋のように、光はドアと思われる場所から微かにこぼれていた。

第一に、「ここはどこだろう？」当然の疑問が浮かんだ。

落ち着くためにも、合理的かつ客観的に状況を確認するよう努めた。

黒の軍に連れ去られたのか？

だとしたら、あの男はどうなっただろうか？

男の姿を思い出す。見た目も印象的なはずだが、思い出そうとすると、一番は目だ。今まで、何千という人に出会っただろう。だが、目が印象深い人に出会った事はない。強い目的意識とでも言うのだろうか。生きることに対する執着のようなものを感じた。

では、どういう人間がそのようになれるのだろうか。現在の社会システムでは、人は生まれながらに、生き方がある程度決まってしまう。それに、脱線して歩むことは難しい。というか、知らぬうちにそういった選択肢を排除している。結局、諦めながら生きるのだ。

生きれば生きるほどに、がんじがらめになり、自由がきかなくなる……。

G Aを行き来し、色々な人に出会った。偉い人。優秀な人。成功した人。その逆の人たち。どの種類にも、あの男は当たらない気がした。

これからどうなるのだろう。永遠にここに閉じ込められるのだろうか。実験台にされるのか？殺されるのか。死ぬのは仕方ないかもしれない。

では、恐れることは何だろう。やはり、周りに迷惑を掛ける事、

特に親に迷惑をかけることは避けなくてはいけない。

彼女は首を振った。さすがにばかげた妄想だ。だが、判断基準は家族の絶対安全であるということを自分に確認する。

ここに永遠に閉じ込められるのも嫌だ。閉じこめられてかなりの時間が経過している。その間、物音一つしていない。

ドアの位置は分かっていた。出口は一つしかない。体当たりしてみようか。頭を使うことに飽き、体を使うことを考え始める。

転びそうになりながら立ち上がった。

その時、彼女の些細な願いは叶えられた。ドアの外から足音がしたのだ。

しばらくすると、ドアは開き同じ服を着た男女が入ってきた。女の方はスラリとしていて身長が高い。男の方は頑丈な体つきをしている。彼女はまっすぐ男女を見つめた。女の方が彼女に声をかけた。「立てるね。ついて来なさい」

彼女は立ち上がり、2人について暗い部屋を出た。

連れて行かれた部屋には中年の彫りの深い威厳を備えた男が待っていた。2人の男女は敬礼する。彼女は部屋の中央に立つよう促された。後ろでドアが閉められる。まるで今から尋問が始まるような雰囲気だ。彼女の心臓は緊張の鎖で繋がれた。低く響く声で待っていた男が彼女に話しかける。

「君の名前は」

彼女は冷静に今自分の置かれている状況を整理しようとする。自分の人生が大きな転換期を迎えていることは確かだった。足が震える。

「松門春菜です」

声は思ったより大きく発せられ、部屋に響いた。威厳を備えた男は、机の上に置かれているパソコンに目を一瞬向ける。

「GC・七三一地区。家族構成は、父、母、妹、弟の計五人。義務教育を卒業後、奨学生として第三高校へ進学。この春、同高校卒業。第三大学進学予定。間違いないかね」

春菜はうなずいた。部屋の中は静かな緊張に包まれている。男は続ける。

「今から2つの選択肢を君に提示する。選ぶのは君だ。まず始めに、私達の所属する組織について説明しよう。君は『シーワン』と言う名を聞いた事があるか？」

春菜は集中した。頭の中で『シーワン』を幾度か唱える。微かな記憶がよみがえり、次第に輪郭がはっきりしてきた。確かテレビのニュースで聞いたことがある。GD地域の反政府組織の中にそんな名前があった。どちらかと言うと穏健派。不明な点が多い。聞き覚えがあるからにはかなり大きな組織のはずだ。

だが、なぜ自分がシーワンにいるか分からない春菜は戸惑った顔をしていた。その表情を見て、威厳のある男は、知らないと判断したようだ。

「シーワンは、政府のやり方に異を唱えている。政府は私利私欲にまみれ、人を道具のようにしか扱っていない。そんな者達に、私達の未来を預けるわけには行かない」

それから10分ほど『シーワン』について、威厳を備えた男は語った。ネージユと言う人物が設立した組織で、GD地域に住む者が奪われた人権を取り戻そうとしている。現在のボール内の認識ではGD地域で生まれた者及び生活している者は、人間としての権利を与えられていない。シーワンの目的はGAやGDといった地域分けをなくし、そこに新たなシステムを確立させ、継続させる事だという。

「これでシーワンのことは大体わかってもらえただろうか。では、君に問う。」

男は一呼吸置く。春菜は覚悟を決めて、言葉を待った。重苦しい空気が、肩にのしかかる。

「単刀直入に聞く。」

「ここで死ぬか。」

「シーワンに入るかだ。」

ただ、入った後は、家族や友人に2度と会うことはできない。又、もし君がシーワンに不利益を与えるような行為をした場合、君の家族にも責任を持ってもらうことになるだろう。すでに、君の家族は我々の監視下だ」

春菜の顔は時が停まったかのように硬直した。

「ちよつと待つて、私は何でここにいるんですか？それよりも、私は、シーワンについて特別何かを知っているわけではありません。なぜ、家族が出てくるのですか」

春菜の声は上ずっていた。

「我々のやっていることは、遊びじゃない。覚悟のない人間をシーワンに入れるわけには行かない」

応える男の声に容赦はなかった。

「ちよつと、私の質問に答えてください」

春菜の声は絶叫に近かった。

男は、思い出したように、表情を緩めた。

「すまない。少し説明を忘れていた。君は、黒の軍に狙われている。君の頭脳と、君の生い立ちは、黒の軍にもってこいなのだ」

「どうしてですか？」

「君は優秀だが、後ろ盾がない。君がいなくなったところで、抗議できるものはいないだろう。もし、帰ったとして、黒の軍は執拗に君を狙ってくる。君の家族にもちよつかいを出すのではないかな」
「では、あなた達は、私の家族を守る。その見返りに、私に組織に入れと言うのですか？」

「いや、規定だ。シーワンを訪れたものは入隊希望者か、スパイとして判断する。すなわち、シーワンに入るものは受け入れ、そうでない者は帰さない」

「そんな……」

春菜は何も言えなかった。

「自分の行動に責任をとるんだな。ここは、そういう場所だ」
頭の中を言葉が駆け巡る。だが、春菜は迷わなかった。この選択を

迫られた場合の答えはすでに出ている。悪い予感はあるものだ。

「なら、死の選択肢を選ぶしかありません」

春菜は顔が熱くなるのを感じた。

威厳を持った男は微かに動揺する。

「なぜ、死を選ぶ」

春菜に迷いはない。

「親に迷惑を掛けてまで生きようとは思いません」

男は頷いた。

「まあ、そう急ぐな。3時間あげよう。ゆっくり考えなさい」

春菜はまた2人の男女に先導されて来た道を引き返し、また暗闇の中に身を置いた。

部屋の中は静かだった。さっきと同じ空間の静けさなのに、感じ方が全く違う。

心が静かだった。

理由もなく、思わず噴出し笑いをしてしまう。投げやりな気持ちだった。

今までの自分の人生について考える。「死にたい」と思ったことは何度もある。うまくいかない事があるとすぐ、現実から逃げ出すために「死にたい」と心の中で思ったものだ。しかし、思うだけで実行に移した事はない。今のように現実的な問題として『自分の死』と言うものを考えた事はなかった。

こうして、死ぬのか。

波乱万丈の人生にどこかで憧れていた。だが、たった一日、いや数時間で、初めから終わりに辿り着いてしまうなんて……

全てがどうでもよくなっていく。

出した答えを変える気にはなれなかった。確かに、組織の中で上手くやれば生きることできるし、家族を危険にさらすことはない。

だが実際問題として、反政府組織への助力は背反罪として無期懲役又は死刑と決まっている。この罪状が、自分はもちろん家族に及ぼ

す影響がいかほどのものか、想像するのは容易い。

この際、スパッと諦めて死んでしまう方が、禍根を残さなくて良いように思われた。死体がどこかで見つければ、黒の軍も諦めてくれるだろう。

人生最後の時間。穏やかに過ごそう。春菜は、目を閉じた。

熱いものが頬をつたう。

暗闇は春菜の心まで入ってくるようであった。

3時間経過。

ギーー。

扉が開く。先の男女が入ってきた。今度は男が言う。

「時間だ」

春菜はゆっくり立ち上がった。

同じ道を歩き、3時間前にいた扉の前に立つ。二人の後ろで春菜は深呼吸した。開かれた扉の中は、3時間前と何も変わっていない。

「さあ、君の選択を聞かせてもらおうか」

威厳を備えた男が、良く通る声で春菜に聞いた。春菜は、震える声を掻き消すように大きな声をあげた。

「面倒くさいのは嫌いです。私が死ねば、黒の軍も諦めるでしょうし、後の憂いもなくなるでしょう」

春菜の体が小刻みに震えだす。それを押さえる為に、必死に手を握り締めた。三時間考えた中で、自分にはこの選択肢しかなかったのだ。春菜の声に影響されたかのように、威厳を備えた男は声をあげた。

「では、私の結論を言おう。君はもう少し長生きした方が良いでしょう。勘違いされては困る。シーワンは暗殺集団ではない。だいたい、黒の軍なら、君の死体でも、利用価値を見出せるだろう。その結果、君の家族が犠牲になることも、考えられるんじゃないかな」

春菜は一瞬頭が真っ白になった。

「え……」

「大丈夫。君がシーワンの一人である限り、君の家族も君も、シーワンが全力を持って守る。約束しよう。これは、シーワン入団試験だ。君は合格したのだ。」

では、本題に入ろう」

春菜の戸惑いを見無視して、男は話を続けた。

「私はシーワン第3部隊指揮官アルエルだ。これから私を呼ぶときは、役職名で呼ぶように。君は、第3部隊所属だ。第三部隊は総勢303人。中隊長10人。小隊長は18人いる。その左にいるのが第三部隊中隊長の一人ソンベン中隊長。右にいる女性がトモ小隊長。基本的に中隊長は教官であると考えてよい。細かいことはトモ小隊長に相談するように。間違ったことをしないように祈る」

「ですが……」

「大丈夫だ。私の見た限り、君はシーワンに入る資格を持っている」
ソンベンが春菜の手錠を解き、正しい姿勢で春菜に話しかけた。

「ついてきなさい」

春菜はアルエルに頭を下げた後で、ソンベン、トモに挟まれて部屋を出た。

春菜は混乱していた。

だが、昔から優等生を演じてきたおかげで、平常心を装うことは慣れている。

階段を上り、梯子を登った。地下にいることはなんとなく分かっていた。だが、外に出て驚いた。

「これは……」

「初めてだと仕方ないかな」

トモが言った。

「ここはGDだよ。春菜が今まで生きてきた地域と全く違うだろ」
薄暗い空間に、傾いたり、無理矢理あるもので修繕を繰り返していたり、廃屋としか言えない建物が雑然と建っていた。

春菜は奥に見える高い建物を見た。上の方は、崩れ落ちているように見える。暗くてはつきりとは分らない。

「昔ここは、GA特別特許地区だったんだ。それがあある事故で政府に、土地ごと見捨てられてね。GDの人間も怖がつてここに近づこうとしないんだ。そこが、シーワンには好都合なんだけどね」

春菜は無言で記憶を探った。

253年・3月起きた原発事故が頭に浮かんだ。偶然、政府の機密データーベースに入り込んでしまったとき読んだことがある。汚染はトリプルAにまで達した史上最悪の人災である。完全な汚染地域指定解除は不可能と判断されていた。そのデーターベースにも、場所が機密として記されていない。その場所に自分がいるとは……。

春菜はそのことは口に出さず、別の事を聞いた。

「もう夜ですか？」

トモは笑い出す。

「まあ仕方ないか。あんな所に閉じ込められて、時間間隔は狂うわよね。今は、昼の一時過ぎよ。おなかの空く時間だね」

春菜は驚いた。

「こんなに暗いの……」

「えっ？GD地域では普通よ。でも、考えて御覧なさい。政府とやらは、GDに人が住んでいることは認めてないのよ。太陽をワザワザGDの上まで走らせる必要はないでしょ」

二人の雑談が長く続いているのを見て、ソンベンがやっと口を開いた。

「トモ小隊長。話はそれくらいにして、とりあえず客間に案内しとけ。私は先に行くぞ」

「承知しました。ソンベン中隊長」

トモは真面目な顔をして答える。ソンベンは頷き、別の方向に歩き出した。

「客間は名前の通り、私たちが普段生活する場所じゃないけど、春菜は突然来たから、準備が間に合ってないの。明日には皆に会える

ようにするね」

春菜は頭を下げた。

案内された部屋には、ベッドと水道がついているだけだった。

「まあ、今日はゆっくり休みなさい」

「ありがとうございます」

春菜は部屋をひと回りすると、確かめるようにベッドに座った。

「硬いな」春菜は思った。

「どうした？」

春菜の様子を見てトモが聞いた。

「いえ、別に……」

春菜の頭の中には新たに入った情報、知っている事情が渦を巻き始めていた。頭の中を整理したい。

トモが部屋を出ようとすると、春菜はそれを見送る気配を見せず、ベッドに座り込んだ。両手を見つめ、そして目を閉じる。

「何が見えるの？」

耳元でトモの声がして、春菜は驚いて顔を上げる。正面にトモが立っていた。

「別に何が見えるわけではありません」

春菜はとつさにきつい口調になったことを後悔した。トモは全く気にしていないようで、安心する。

「気分の問題？でも、春菜には何か見えてるのかな？なんて思える風だった」

春菜は一つ息をはいた。

「手枷、足枷……。どこに行ってもこれは重くなるばかりで、軽くなるうとしません。こんなので私はちゃんと前に進めるのでしょうか？」

「生きている限り、誰にでもあるんじゃない。どんな幸せに見える人にもね。私から見たら、春菜はメチャクチャ幸せな人生を歩いてきたように思うけど、それでもないのね」

「いえ。そういう意味じゃないんです。幸せとか。不幸とかじゃな

くて……」

「春菜もいつかネージユ様に会う機会があると思う。きっと、春菜もネージユ様に惹かれる。そして、それが生きる理由になる」

春菜はトモを見つめた。トモの表情は明るかった。

「ネガティブになるのも無理ないと思うけど、前向きにね」

トモはそう言うのと、今度は振り向かずには部屋を出た。

春菜にとって思いもよらない人生が、始まった。

ここは風も吹く。空（天井）も青い。GA地域軍総司令本部>アトラス<の前に広がる庭園である。ここに入る事ができるのは、GAでも選ばれたごく一部の人間である。空が青いことを知らない者が大半のこの世界で、この空間は特異な現代アートだった。

大きな広葉樹の木下に立っている男の髪は揺れていた。軍服に身を包んだ姿は、若さと情熱に溢れている。

「クリフ様。申し訳ありません。お待たせていたしました」

クリフと呼ばれた軍服に身を包んだ男がその声に反応した。

「気にする事はない。ここは落ち着く。それに、父上からの用事を終えて今来たところだ。では、行こうか」

クリフが先に歩き、男がそれに続く。2人ともまだ若い。どう見ても二十歳前後だ。しかし、着ている軍服は2人ともその歳では普通着ることのできないものだ。

スチュワード・クリフは今年19歳になる。政府軍最高総司令官を父に持ち、代々続く名門軍閥の出身だ。彼自身も類稀な才能に恵まれた。18歳にして首席でアトラス大学校を卒業した。これは最年少記録である。現在すでに大尉であった。エリート街道をばく進することは間違いない。

その後が続くのが、マストレード・レイン。クリフより2歳年上で、階級は中尉である。

二人がアトラスの庭園を出ると、どこからともなく車がやってき

た。ドアが開き彼らは車に乗る。

車はGB地域に入り10分ほど走った。その間、GAからGBの関所で一回停まり、その時間は一般の3分の1である。高層ビルの前で2人は降りた。彼らは車の中でも、車を降りてからも特別な会話をしていない。部屋についてすぐクリフはポケットから棒を取り出した。先にボタンのようなものがついている。彼は机の上に上着を投げてから、ソファアーに座りボタンを押した。

部屋に見えない振動が伝わる。

「父上は本当に用心深い。そう思わないか？レイ」

レイは、クリフの前にコーヒーを置き向かいに座ってから答えた。

「仕方ないですよ。すべてクリフ様を思つてのことです。クリフ様をくだらない事で失脚させないための親心ですから」

クリフはレイの答えに不服そうな顔を向ける。

「レイはいつも父上の味方だな。僕は父上に秘密を持つ事ができないのだぞ」

レイは笑いを含んだ声でクリフに答えた。

「本当です。私がクリフ様にそれを渡したことを父君が知ったら私は殺されてしまいますね」

「さあどうだろうな。まあ実際、保身の術に長けていないとやっていけないのだが」

レイはクリフが机の上に置いた棒を目で追った。情報合戦が激烈となるにつれて、政界に公私の分別がなくなってきた。くだらないスキャンダルで政界を去るものも後をたたない。若く才能に溢れた我が子を妬む輩から守る為、クリフの父親はクリフのすべての生活を管理しようとした。今いるこの部屋にもいくつもの盗聴器が眠っている。彼の父親以外の者が仕掛けたものもあるだろう。

クリフはそれら盗聴器をすべて取り除く事を望まない。こつそり仕掛けたはずの盗聴器がすぐに取り除かれたとなると、クリフの私生活を知りたがっている者はさらにクリフに対する警戒心を強めてしまふだろう。情報を得られないこと、それ自体が情報になってしま

うのだ。そこでレイが用意したのがその棒である。半径5メートル以内の部屋に効力がある。室内にある盗聴器やそれに値するものに偽の情報を流す機械である。レイが苦心に苦心を重ねて、クリフの要望に応え作り上げたものだった。室内の本当の姿が他の者に知られる事はない。定期的にレイが整備し改造を重ねている。この機会は『ミイミ』と名づけられた。旧国家時代の大陸語で『秘密』という意味がある。

ミイミは発動すると、間もなく感知した空間のホログラフィーが登場する。それに会話や動きを入力すると、それを盗聴器等にデータして送る事ができる。入力しない場合は、基本プログラムに沿ってそつなく活動する。

クリフは足を組みなおし、机の上に置かれたコーヒーカップをとった。

「アトラスのコーヒーは本当にまずい。どうして皆あんなコーヒーを飲む事ができるのだろう」

「クリフ様がこだわりすぎるのですよ。私は退職したら、喫茶店を開くのが夢ですから。クリフ様の下で修行させていただきました」

レイも一口コーヒーを味わった。満足そうな表情を浮かべる。二人は入力片手に談笑した。一通りの入力が終わったところで、二人は手を休めた。レイが真面目な顔で口を開いた。

「シーワンについてですが、ネージユ氏が病気であるかどうかを調べることはできませんでした」

「コーヒーカップを机に戻し、少し間を置いてクリフは答える。その表情はクリフ独特のもので、内心を伺うことはできない。クリフはレイの前では表情豊かだが、一歩外に出ると、この表情を崩さない。例え、実の親の前でもだ。

「シーワンの組織力は他組織をずば抜けている。GDは慢性的な食糧不足であるにもかかわらず、シーワンでは自給自足に成功している。そうだろう？」

レイは軽く頷いてクリフに応える。

「今はまだ穏便派として行動をしているが、いつ本格的に政府に向かってくるかわからない。それも創設者であるネージユの力量に頼るところが大きいのではないかと僕は考えている。この類の組織が急成長する理由は、正しい決断を正しい時にすぐできることだ。シーワンは客観的にみて、中央の決断が末端に届くのも早いようだ」

「調査によるとネージユ氏は、ここ半年姿を見せていないと考えられます。徹底した情報制御もすばらしいですね。なぜ、政府はシーワンをほかの反政府組織と共に放って置くのか、シーワンを知れば知るほど理解できません」

レイの疑問にクリフが答える。

「理由は二つだ。おそらく、政府の上層部と繋がっている。そして一種の平和ボケだね。長く同じ体勢が続くと指導者は利権争いに忙しくなるものなのだ。僕は生まれながらに持っていたからね。そんなモノに興味がもてないんだ」

「誰かと繋がっている可能性は、高いですね。シーワンを全く調査しようとしなかったところは、やはり、おかしいです」

クリフは少し楽しそうな声で答える。

「僕は政府と軍部に対してG Dの反政府組織を全面的に打倒するように意見文を提出した。今のように小出ししていても成果はない。反対に今はバラバラの組織が結束してしまうかも知れない。僕の立場を考慮して、数カ月後には何か起こるのではないかな。それによって上層部の力量がわかるだろう」

「シーワンはネージユ氏がいなくなればどうなるでしょう？」

「さあ、どうなるだろうねえ。僕らの社会みたいに誰かが空席を埋めても問題ないということはないだろうね。自然消滅の可能性もある。だが、ネージユが僕の期待にこたえてくれるなら、後継者をちゃんと用意してくるだろう。病気ならば、事前に考える時間はあるはずだ」

「それでは、またシーワンの情報を引き続き集めてみますね」

「そうだな。多かれ少なかれシーワンは、僕の人生に影響を与える

だろうからね」

クリフはいたずらを思いついた子供のような顔になった。こういう顔をする時のクリフは本当にレイが思いもつかないような事をする。レイは少し心配になった。レイの心を感じ取ったようにクリフが言う。

「僕は暇が嫌いだからね」

レイの心配は募るばかりだ。

春菜がシーワンに入ってから半年が過ぎた。毎日同じことの繰り返しであり、全く違う日々を過ごしていた。朝四時に起床。午前九時まで農作業などの労働。二〇分の休憩の後一時まで学科勉強。一時から三〇分昼食で、その後二時まで昼休憩。午後は実践訓練。五時半から七時までが、休憩か入浴又は夕食。そして八時には全員が床につく。春菜に対しては七時から九時まで特別授業が行われた。一日が終るとヘトヘトになる。ベッドの中に入るとすぐに眠り込んだ。

特別授業が終って、部屋に戻るまでの数分に物思いにふける事が多い。

ふと、初めて共同部屋に入ったときの事を思い出した。

「今日から新しくこの部屋に入ることになった、春菜だ」

窓からの弱弱い光だけが部屋を照らしている。部屋にいる全員に向ってソンベンが威圧的な声で言った。全員すでに就寝準備ができている様子だ。

「私はこの室長も兼ねている。わからないことは聞いてくれ」

トモが柔らかい口調で説明する。

「春菜と言います。よろしく願います」

春菜は部屋全体に響く大きな声で、挨拶をした。緊張に次ぐ緊張で、余裕がない。この部屋に来る前言われたトモの言葉「姓は言わ

ないように」を守ることと精一杯だった。

部屋には2段ベッドが7台あった。春菜のベッドはドアに一番近い二段ベッドの下だ。必要最低限のものすでに準備されている。ソンベンが部屋を出るとみんな自分のことをし始めた。トモが簡単な説明をする。洗面場、トイレの位置。明日からのこと。メモを取る紙もペンもなく、春菜は次々に言われることを頭の中に必死に叩き込んだ。

「四時に鐘が鳴るからそれで起きれば良い。詳しいことは実際にやりながらにしよう」

トモは軽く春菜の肩を叩き自分のベッドへ向った。春菜のベッドから最も離れた場所で、窓の横にあるベッドだ。部屋中の人間はトモが近づくと挨拶をする。それに対してトモは優しく、一日の労をねぎらう様な声で返事をした。

春菜は自分のベッドに座り、支給された物を確認する。向かいの住人が春菜に声をかけてきた。すでに寝る準備万端のようだ。薄着のため鍛えられ引き締まった体であることがよく分かった。

「私の名前はアリスよ。顔洗いに行くときは言って。教えてあげるわ」

アリスの上から声がした。真っ黒な髪が春菜の目を覆い、次の瞬間そばかすの多い愛嬌のある顔と目が合った。

「私はユキよ。よろしく」

今度は春菜の上から声がし、軽やかに蝶が舞うような物腰で人が降りてきた。

「私はカタリーナ。よろしくね」

皆明るく気さくに話しかけてきた。春菜は、安心すると同時に、一人一人の名前を聞き逃さないように、覚えた。

一部屋は15人前後のようだ。部屋は男女分かれているが、それ以外は担当に分かれて男女ともに訓練や授業が行われている。春菜は義務教育以降全寮制に通っていたため、集団生活は慣れていた。

入ったばかりの事を、変に懐かしく思い出しながら、春菜は体の

熱っぽさを感じた。部屋につくと、皆もう寝ていた。春菜は音を立てないようにベッドに入る。

翌日目を覚ますと、春菜は体がいつも以上に重く感じた。吐き気も感じ、頭がガンガンする。

今まで勉強ばかりして運動をしていない春菜にとって、シーワンの生活は楽なものではなかった。慢性的な運動不足で、体重は標準以下というものの、下腹部分が出ていた。初日は、目に見える周りとの体格差に赤面せざるを得なかった。

生活は容赦なく一日、一日と春菜の心と体に疲労を蓄積させていた。「なんでこんな目にあわなくてはいけないの？」春菜は何度となく自問自答した。その度に自分で答えを出す。「がむしゃらに頑張ることでは、道は開けない」春菜は文句一つ言わずに毎日を送った。だから調子が良くないことを、春菜は誰にも言わなかった。春菜が皆についていけないことは明らかだった。そのため、皆が気を使ってくれていることを春菜は痛いほど感じていた。それに対し、春菜にできることは何もない。その事は、春菜の精神に少なからぬ影響を与えていた。

朝一の農作業の最中、目の前がグルグル回り、足元はグラグラ揺れた。春菜は「おかしいな」と思い、かがんだ姿勢から立ち上がり、背を伸ばした。

すると、いつもの薄暗さが急速に暗闇に変わる。

「どうした春菜？」

ユキが春菜に話しかけた。春菜は聞こえていないようだ。バタツ。

仰向けに倒れそうになる春菜を、ユキはどうか受け止める事ができた。頬を二回軽く叩く。トモがすぐに近寄ってきた。

「顔色が悪いな。医務室に連れて行こう」

トモはユキから春菜を受け取る。

「大丈夫でしょうか？」

「頑張っていたから、疲れが出たんだろう」

「なにかできる事があつたら、言ってください」

「ありがとう」

シーワンでは各部隊に役割が決められている。後方支援は第四部隊があたる。農作業は全部隊が行ない、第四部隊の担当地域は医務室の近くだ。トモが春菜を抱えて医務室に向うと、ソウタ小隊長とマキノ小隊長が小走りで近づいてきた。

「どうした？」

ソウタがトモに話しかける。

「疲労だと思う。作業中に倒れたんだ」

マキノが春菜の腕を掴んだ。

「新入りか」

「ああ」

「熱いね。早くベッドへ」

トモは部屋に入り、春菜をベッドに寝かす。熱を測ると39度5分あつた。

「高いな。まあ点滴打って、安静にしておけば問題ないだろう」

ソウタは手際よく点滴の準備をした。

「それにしても、もう少し早く分かって良かったんじゃないか」

「春菜は口数の少ない子でね。変化をわかってやれなかった」

「トモを責めても仕方ないじゃん。ソウタその言い方は良くないよ」

「いざ戦いが始まったら、皆極限の緊張にさらされるんだぞ。自己管理はもちろん。俺たちは隊員にも十分気を配らなくてはいけないんだ」

「そつだな。ネージユ様は私たちが無駄死にすることは望んでおられない」

部屋に沈黙が走る。

「すみませんでした」

静かな部屋に、春菜のかすれた声が響いた。3人はベッドに視線を注ぐ。

「ご迷惑をお掛けしました」

トモは、枕元に立ち、春菜の頭をポンポンと優しく叩いた。

「目を覚まして最初に言うことはそれか。私が春菜のことを迷惑と思うことなんてありえないよ」

春菜は目頭が熱くなるのを感じた。顔を隠したいと思ったが、失礼だと思いやめる。変わりに涙を必死で抑えた。

「そうよ。私達は仲間なんだから。人間誰だって体を壊すことってあるのよ。迷惑だなんて、全然思わないわよ」

「ありがとうございます」

「俺達は別に特別な事をしたわけじゃないさ。まあ、これから接点も生まれてくるだろう。俺は、ソウタ。第四部隊の小隊長だ。よろしくな」

「同じく、第四部隊小隊長マキノ。よろしくね。第四部隊には他に9人の小隊長がいるの。中隊長は6人。第三部隊に比べると、少ないわね」

「よろしくお願いします」

春菜は起き上がって頭を下げようとした。トモがそれを止める。

「いいから。無理しないでゆっくり休みなさい」

春菜はそれから全快するまで一週間かった。その間、部屋の皆が代わる代わる時間を見つけて春菜の見舞いに来た。色々な話をした。

みな違った理由でシーワンに入っている。始めのうちはどうであつたか春菜に知るすべはないが、今では彼女達のシーワンに対する思いは家族を大切に思う気持ちと同じようだと感じた。

春菜は皆の考え方に好感が持てた。大きな信念も必要ではあるが、それだけでは偽善にしかならない。直接自分の利益につながるわけではないレジスタンス活動を続けるためには『大切なものを守る』という素朴な思いが必要であつた。

そしていつしか春菜は決めた。シーワンで生きる。もう迷わない。何度も自分に言い聞かせた。

第三章

一年が過ぎると春菜の体もようやくシーワンの生活に慣れてきた。それでも、休憩時間に皆と同じように運動しようとは思わない。頑張って皆の中に入るほうが良いかもしれない。だが、無理はしたくなかった。

春菜は休憩時間を人のほとんどいない運動場の隅でボーっと過ごす。みんなは窮屈そうにボールで遊んでいた。

今日の午前中は霧囲気がいつもと違った。ソンベンの機嫌が異常に悪く全員に伝染したようだった。いや、最近中隊長に始まり、みんなもイライラを隠せない。原因はネージユが長く姿を見せない為のようだ。春菜もネージユに会った事はない。不安がシーワン内に広がっているのだ。

そんなことを考えていたとき、春菜の耳に怒声が届いた。

「お前、何すんだよ」

春菜は思わず立ち上がった。誰の声か、春菜の位置からは確認できない。異様な雰囲気、鳥肌が立った。声の方に急ぐ。

膝を地面についているルナスサの姿がはつきりと見えた。ルナスサは横も縦も人一倍大きい。ルナスサは春菜と同じ部隊だが、部屋は違う。口数が少なく、話したことはなかった。

「図体がデカイだけで、のろまじゃないか！」

春菜にはルナスサが拳を握り締めるのが見えた。それは振り上げるためではなく、我慢するためだった。人が集まり輪を作り始める。春菜も輪の一部になる。輪を掻き分け最前線にたどりついた時だった。標準的に見たら体の大きい、だがルナスサと比べると一回り小さく見える耳まで真っ赤にしたコンフの右手が鋭く動こうとした。周囲の声が大きくなった。

「ダメだ」春菜の頭の中に赤いランプが点滅した。春菜は何も考えていなかった。ただ、体が勝手に動いた。

全身全霊の力を込めて、興奮したコンフの腕にしがみつく。

周りではやし立てていた者たちの声が一瞬止んだ。コンフは不機嫌そうに腕を大きく振った。春菜は吹き飛ばされる。

春菜は喉がつまり咳き込む。

「コンフ、やってしまえ！」

怒声が輪から飛んできた。それに合わせ、一瞬止んだ罵声が復活する。

コンフは大きく頷き拳を振り上げた。春菜は起き上がりながら、声を張り上げて叫んだ。

「無責任なことを言うな！」

春菜はルナスサとコンフの間に割ってはいる。そして、はやし立てる周りを睨みつけた。

「ルナスサが何をしたか知らないけど、この雰囲気は何よ」

ルナスサは何も言わず黒い巨体は地に膝をつけたままだった。

「そいつが、俺にぶつかつたんだ」

コンフが唸る。春菜は思わず「はあ」と言いそうになった。春菜より明らかに年上で、体の大きい男の発言とは思えない。しかし、場の雰囲気は春菜の思いとは逆だった。コンフに対して声援が飛ぶ。なぜ、ルナスサは何も言わないのか。春菜は我慢できなかった。

春菜は罵声に対抗して、声をさらに張り上げる。春菜の声は、コンフはもちろん野次馬達にもはつきりと聞こえただろう。

「ぶつかつたから何だって言うの？運動場は広くないし、仕方がないじゃない」

春菜の声は良く通る。

「新入りはだまれ！」

コンフには春菜と言い合う気持ちは全くないようだ。コンフはルナスサに向って拳を振り上げた。春菜はとっさに間に入る。

ドカツ。

春菜の足が地面から離れた。顔に強烈な痛みが走り、口の中に血の味が広がる。

「お前、何するんだ……」

春菜は倒れた。コンフの声は、動揺していた。今度は簡単に起き上がれない。足がガクガクしている。広場の外から、カタリーナが走ってくるのが見えた。

「あんたこそ何がしたいの？」

痛みと衝撃にこらえ、なお、鋭い視線で春菜はコンフを見上げた。
「ルナスサは何もしようとしてないのに、一方的に殴るの？おかしいよ。あなたにとってシーワンは何なの！」

春菜が叫び終わると中隊長達の声が聞こえた。

「何事だ」

ソンベンに第三部隊イシュー中隊長、第三部隊グオハ中隊長、第二部隊イオリ中隊長と続く。

アリスとカタリーナがコンフと春菜の間に立った。トモはルナスサとの間に立つ。ユキが、春菜を抱えた。

「大丈夫か？」

ユキが耳元でささやき、春菜は頷いた。

その状況を見ただけで皆は状況を理解できたようだ。コンフが慌てた様子で、自分の都合のいいように弁解をする。周りは静かになり、コンフの意見を誰も否定しなかった。春菜は違うと大声で叫びたかったが、トモが首を振って静止する。春菜は急にどうしようもない無力感に襲われた。

「コンフの言うことは本当か？」

天然パーマに四角い顔が特徴的なグオハがコンフ、春菜、ルナスサそして周りに目をやった。誰も反応しない。

春菜は反論すべきかどうか一瞬悩んだ。

「よしわかった。騒ぎを起した春菜とルナスサ反省室五日だ」

周りが一瞬ざわついた。

春菜達に好意的なものではなかった。春菜は体が急に熱くなったのを感じた。

春菜は起き上がりながら、叫ぶように言った。どうにか理性的に

言おうとする。

「グオハ中隊長、私は納得できません。コンフが言ったことが正しいとしても、彼にも非があるではありませんか」

「私もそう思います」

さすがにトモが力強く頷きながら、春菜の意見に賛成する。

今度はソンベンが言った。

「春菜。お前は どうして騒ぎを大きくしたのか？」

コンフの勝ち誇った顔とソンベンの侮蔑を込めた視線を春菜は見た。春菜は頭に来た。

「新入りが何もいえないような組織に未来なんてない。ゴホッ。正しい事は誰が言っても正しいし、正しくない事は誰が言っても正しくない。そう思っているから、みんなここにいないのですかハア、ハア」

殴られることがどれだけ体力を消耗するか春菜は始めて知った。

喉がつまり咳き込まずにはいられない。後ろで初めてルナスサが動くのがわかった。春菜は小さく振り向きルナスサを見た。目には知性の光が輝いている。

春菜はわかった。だからスナスサに向って小さく笑顔を向けた。

そしてしっかりと前を向く。

「何だ。その反抗的な目は！」

ソンベンが叫ぶ。

「わかった。今回については春菜だけ反省室一週間だ」

今度は明らかに周りから反対の空気が流れた。だが春菜にとってそんなことはもうどうでも良かった。

「反省室一週間に値する処罰を中隊長の独断で決める事ができるのでしょうか？」

精一杯の嫌味を込めて春菜が言う。火に油を注ぐというなら、まさにこれがそうだろう。

イシューら小隊長の顔にも難色が浮かんでいた。反省室は処分としてかなり重い。それは、独断で決められるべき事ではなかった。

「責任は私が全て取る」

ソンベンが吐き捨てるように言うと、誰も何も言わなかった。

ソンベンが春菜に近づくと、トモをはじめ部屋の壁は壁を作ろうとした。が、ソンベンはそれを払いのけ、腕を掴んだ。

その間から、コンフの脂ぎった顔がのぞく。

春菜に抵抗する気はなかった。

春菜だけが連れて行かれた。

反省室は春菜に取って懐かしい場所であった。光に乏しく暗い部屋はまさに、一年前に来たことがある。

しばらくしてトモが荷物を抱えてきた。

「無茶なことを……。食事は一日一回。水は一日このバケツ一杯だけだ。このタオルを一週間使ってくれ。こっちには薬などが入っている。治療は自分でしないといけないんだが……」

トモは表情を緩ませ言葉を詰まらせた。トモが合図をすると身軽な動作でマキノが入って来た。春菜はびっくりして声をあげそうになったが、口の中を切っていて痛さに消えた。

「まったく、女の子が顔に怪我をして治療させないなんて。傷が残ったらどうするのよね」

マキノは慣れた手つきで応急処置をする。

「ありがとうございます」

春菜は言葉をとぎらせながら言った。

「何言ってるんのよ。当たり前のこととしてんのよ。私は、春菜は間違ってると思う。今回の中隊長達の判断は間違ってる」

「マキノそれ以上は言わないのよ」

トモはマキノが言い過ぎないように注意した。マキノは少し厳しい顔になる。

「分かってるわよ。上長の悪口を言うことは、組織の団結を乱すから言ってはいけないこと。でも、今回はネージユ様なら必ず分かってくれるわ」

「そうね」

トモは呟くようにマキノに賛成した。

「すみません。聞きたい事があるのですがよいですか？」

「いいわよ。何？」

トモとマキノが同時に返事する。

「コンフはどうしてルナスサに辛く当たるんですか？」

トモが答える。

「春菜には分からなくて当然か。そもそも政府の地域分けは、人を『差別』する為の制度だったんだ。目的は権力集中と人心をまとめる為。その第一段階は巨人族の迫害から始まったんだよ。ルナスサをみても分かるだろうが、すぐに自分とは『違う』ってわかるだろうが、標的になった。理不尽な理由さ。そして巨人族が逃げ出した場所は、他の場所と区別された。それが、GDの始まり。その後、GDには生活が困難になった者や犯罪者が逃れて住み着くようになった。生まれたばかりの子供を捨てる場でもあるけどね……」

トモは急に口を閉じた。マキノが慌てて口を開く。

「今はもう巨人族はほとんどいないの。GDに移り住んだ人々は潜在的に巨人族を排除したのね。どんな人間の心にも『差別』ってやつがあるのよ。それを表に出すか出さないか、又は打ち消すかで人間の価値が問われるんだろうね。ルナスサは今までシーワンの誰も傷つけたことないし、ネージュ様を信頼していることを皆知っているはず。でも、コンフみたいな単純なやつは気分次第に波がでやすくてね。どうしようもないのよ」

春菜は心に靄の様なものがかかるのを感じた。マキノはこの話は止めようという感じで声を明るくした。

「これ、ソウタからよ。飲み薬。よく効くのよ。毎日飲みなさいね」

コッ。コッ。物音が近づいてきた。

「誰か来る」

「長居しすぎたね」

トモが頷くと、マキノは闇にまぎれた。あまりのあざやかな動き

に春菜は息を呑んだ。

「たぶん。もう来られないわね。一週間頑張るのよ」

トモが春菜の肩にそっと手を置き、ポケットにそっと何か入れた。次にすばやく荷物を片付ける。ドアを開けて、鍵を閉めた。

トモが出て行くと、春菜はドアに耳をあてる。ソンベンとトモの会話を微かに聞き取る事ができた。

「遅かったな」

「そうですか。申し訳ありません」

「どんな理由があるうと、私に逆らうな」

「はい」

「もういい。水を届ける者を変える。お前はここに来るな」

「分かりました」

タオルは一枚だけで、バケツは大きくない。春菜は数分間それを見つめた。そして、ドアから離れると、あの時と同じように壁に背を当て座る。傷口から痛みが走った。頬に手を当てると、口の中が染みる。

「これではいけない」

春菜はさつき起こった事の原因を完全に理解しているわけではない。あの時、周囲にいたみんなの雰囲気は異様なものだった。

気分転換に知識として知っている‘外’の世界に思いをはせることにした。

そこは、上を見上げると空と言う空間が広がっていると聞く。どこまでも果てなく広がる空間で、昼は青く、夜は黒い。昼と夜の間は空が黄金色に輝くこともあるという。春菜は黒い空は想像ができた。ボールの中も夜は黒いからだ。しかし、青や黄金色の空を想像することはできなかった。

地上には木々が生い茂る場所があり、人が住めない場所に砂場がある。あまりに広いため、言葉や決まりの異なる社会がいくつもあつたらしい。

そして、大地の果てには海がある。青や緑の色のついた水がどこ

までも広がっている。海は、母なる海とも呼ばれ生物の始まりの場所と言われた。

外のことを考えると春菜はしばし、幻想の世界に足を踏み入れた気分になる。ただ、そんな世界が人々の生活の場であった時、そこには現実が存在する。奇麗事ばかりではなかった。

白い肌の者が世界中に影響を与える『力』を持った時代がある。白い肌の者たちは自らの幸福のために故郷を離れ、様々なことをした。やがて、力により白い肌を持たない者を見下すようになった。特に黒い肌の者を奴隷とした。

それから、黒い肌の者が白い肌の者と同等の人間として権利を回復するまで長く時間がかかる。人には無意識のうちに自分より下の者を探したがる習性があるのかもしれない。一度定着してしまった概念を無くすのは簡単ではないだろう。

それは今から数百年いや、数千年前の出来事である。春菜自身は黒い髪に黄色と白の中間のような肌をしている。だが、今まで肌の色でどうだ、ということ考えたことがなかった。考える環境になかった。だから、外見でルナスサが不当な行為を受けなければいけないとしたら、それはおかしいことだった。

このような春菜の思考は、安穏な生活の中から生まれたわけではない。春菜の生きてきた道は、生まれ持った状況は関係ない。結果を残すことが道を切り開く唯一の方法だった。春菜はG Aの第三高校に入学した頃、成績は中の下だった。この中途半端な成績はクラスにとつて居ないも同然だった。春菜は当初、別にそんなことは気にしなかった。春菜は他人に特別な関心を示す方ではなく、グループに属さなくても一人でやって行けると思っていた。だが、奨学生的身ではそれは許されないと分かった。春菜は成績を上げることで煩わしい人間関係から解放された。

その中で、春菜は理想の人間関係を描いていた。それは、利害関係のない、互いを思いやることから始まる人間関係だ。シーワンにはそれがある。そう感じたからこそ、春菜はシーワンに希望を見出

せたのだ。

暗い部屋の中で春菜は小さく首を横に振り、呟いた。

「これではいけない……」

それはまるで呪文のように暗闇に溶け込んだ。白を基調とした整った部屋に一人、ため息とともに呟きが漏れる。

白い部屋に、呟きが響く。

「まあ、仕方ないな」

トントン。ギー。

ノックの後にドアが開いた。

「やあサイレス、どうだい？」

サイレスは整った顔を崩さず報告した。

「ネージュ様の言う通り他の組織に協力を求めました。他も最近の政府の動きには危機感を感じています。青藍の星輝氏よりネージュ様へ伝言です『正しい時に、正しいタイミングで、協力を求められたら、断る理由はない』ということです」

ネージュは顔をしかめた。サイレスの言葉の中に不愉快な言い回しがあったからだ。サイレスはそれを知っているが、改めようとはしない。

「ネージュ様はやめろといっているだろう」

ネージュは口ごもった。サイレスとは長い付き合いになるがどうしてこう固いのだろう、そう思いながらサイレスが相手にしてくれそうにないので、話を戻す。

「星輝らしい発言だな。青藍が共に行動することになれば、自然発生的に他も協力してくるだろう。まだこちらも準備段階だ」

「こちらから動くことはできませんか？」

「クーデターでも起こす気か？」

言った後でネージュは首を振った。

「クーデターでは何も変わらない……確かに、一石を投じることにはなるだろう。だが、根本を変えることは不可能だ。私はシーワン

をそんなことのために作ったのではない」

「ですが時間が……」

「慌てて事を起こしても、やり直す時間がないだろ。急がば回れ」

「そうですね……」

サイレスは語尾を濁した。

「まあ良い。気になる事があるんだ」

「何でしょうか？」

「私たちのシーワンで起こった事なんだが……」

ネージユは手を伸ばしパソコンのキーを叩いた。パソコンの画面に乱れた映像が映る。画質は悪く、雑音は多いがどうにかどんな会話が交わされているか分かった。

「ルナスサに、コンフ……」

サイレスは画面に映った人間の名前を次々に口にした。

「あの子は、確か……」

「そう、一年くらい前かな。サイレスを追いかけて、シーワンに入った子さ。名は春菜」

映像は続いていたが、春菜一人が連れて行かれる場面を過ぎると、ネージユは話し始めた。

「せっかく入ってくれたのに、落胆させただろうな。私もサイレスも内に目をやる事が疎かになっていた。中隊長クラスがこれでは、全体の質の低下は免れないだろうな」

「残念ですね」

ネージユはしばらく下を向いた。しばらくすると、サイレスの方を向く。押さえてはいるが、怒気が顔からこぼれる。

「この過ちは、どうにかしなくてはね」

ネージユは拳を握り締める。

「落ちついてください。この類の言い争いを完全に無くすのは現段階では不可能です」

サイレス自身も腹立ちを感じていた。だが、ネージユも考えているだろう次の一手の為に、前に進まなければいけない。

「ありがとうサイレス。だが、この映像も凶報ばかりを伝えたわけではない。シーワンの志をちゃんと理解している者がいることも分かったから……」

「そうですね」

「春菜はとても良い子だね。こんな子が偶然シーワンに入ったなんて信じられない気がするよ」

「何か裏があると思いますか？」

サイレスは慎重な意見を述べた。ネージュはそれを吹き飛ばすように、顔に笑みを浮かべる。

「それは考えすぎだよ。サイレス。目立つ子ではあるが、彼女が自分で意識した行動でないことは明白だ」

「なぜそう言いきれるのですか？」

「目だよ」

「目？」

「春菜は人の目を良く見るんだ。目は口ほどにモノを言っているだろう。それに、経歴はすべて調べたが、政府の者ということはないだろう。あつたとしても、それはそれで良い」

「良い子だからですか？」

「そうだ。会いたいな。顔色もだいぶ落ち着いたし、長く皆に会っていないし。よし、決めた。会いに行こう」

「気持ちわかりますがノーグ先生に確認してからでないと……」

「では、いちよう聞いておくよ」

「はい。私から伺っておきます」

「えっ？」

「私はネージュ様を信用しています」

「おう」

「ですが、ネージュ様のご自身に対する判断に対しては、半信半疑です」

「ひどくないか？」

「ひどいですか？」

「ひどいと思うぞ。だが、一つ言っておくぞ」

「はい」

「私は、私よりシーワンが大切だ」

「存じております」

そう言いながら、サイレスは心に浮かんだ言葉を飲み込んだ。

（私は、シーワンよりネージュ様が大切なのですよ）

「後一つ、言っておきたい事があるんだが」

「はい」

「二人の時は、ネージュ様はやめなさい。いや、やめてくれ」

サイレスは、静かに首を横に振った。

「ダメです」

「何で？」

ネージュの声は大きくなった。対照的にサイレスの声は、冷静だ。

「それが、私のやり方だからです」

ネージュは、サイレスの顔をじっと見つめた。サイレスはネージュの視線をそらそうとはしない。全身で受け止める。

ネージュはため息をついた。

「分かった。これから、よろしく頼むよ」

「はい。ところで、ネージュ様、のどが渇きません」

「あ、ああ」

「では、今日はハーブティーにしましょうかね」

「……」

ネージュはハーブティーがあまり好きではない。サイレスはもちろんそのことは知っている。

「わがままを言っではいけませんよ。お茶の葉を手に入れるのは大変なんですからね」

サイレスは一転穏やかな表情で、部屋の外に出て行った。

ネージュはサイレスの出て行ったドアに向って呟いた。

「ありがとうサイレス。でも、私も寂しく思うときがあるんだよ」

ネージュは目を固く閉じた。意識を集中させる。部屋には、つけ

っぱなしのパソコンから雑音にまぎれた微かな会話が流れていた。

一週間、春菜は反省室の中でストレッチを欠かさなかった。怪我の治療は順調のようだ。ソウタの薬のおかげだろうか。痛みはまったくくない。

始めの二、三日はふさぎこむことが多かった。それを過ぎると、もともとプラス思考の春菜は元氣を取り戻した。落ちついて考える時間は十分にあった。

腕立て伏せも今では50回はできるようになった。シーワンに入ったばかりのときは10回が限界だったのだから、すごい進歩だ。外から足音が近づいてきた。春菜はそれを無視して、腕立て伏せを続けた。

「一週間経った。出ていいよ」

トモがドアを開けて入ってきた。

「はい」

返事をする春菜は立ち上がり、トモの後につく。

「体作り、ちゃんとしてたんだね。えらいよ」

外に出るとトモは急に春菜の方を向いた。顔をまじまじと見る。

「良かった。顔の怪我は大丈夫のようだね。いや、別にそういうわけ心配していたわけではないのだが……。今度、ネージユ様が新しく入って来た者たちとお会いになると言うことだ。春菜、あなたも行くことになるだろう。私はソンベン中隊長に報告に行かなければいけないから。一人で帰れるね」

訴えるように言われた。春菜は頷くしかなかった。安堵した表情を浮かべて、トモは足早に春菜の前から去っていった。

ソンベンの事を考えると、春菜の心は穏やかではいらなかった。部屋に向って走っていると、隠しても隠し切れない巨体を春菜の目とはとらえた。

「ルナスサ？」

確信はあったが尋ねるように春菜が声をかける。ルナスサは振り

向いた。春菜の倍はある。癖のある長い髪を後ろで一つに結んでいた。

「あなたに迷惑をかけた。すまない」

春菜は驚きの表情とともに、明るい声で言った。

「何を言ってるんです。ルナスサは悪くないですし、謝る事はないですよ」

それでもすまなそうな顔をしているルナスサを見て、春菜は肩ではなく肘をポンポンと叩いた。

「もう、そんな顔しないで下さい。この一週間辛くなかったとは言えませんが、無駄な時間を過ごしたとは思いません」

春菜はルナスサに笑顔を向けた。

ルナスサはその笑顔を見たとき『太陽』を思い浮かべた。もちろん、ルナスサは太陽を見た事がない。ルナスサにとって太陽とは、自ら光り輝く力を持った者。光源を表していた。

「私たちこれから仲良くなれますよね。部屋に戻りましょう」
年上のルナスサに対し春菜は穏やかな口調だった。春菜は、なかなか動こうとしないルナスサの手をとった。

突然、ルナスサが地面に膝をついた。今までとは違い貫禄があり、かつ優美な動きだ。春菜は驚かずにはいられない。そんな春菜の様子を見ながら、ルナスサは春菜の片手を取った。

「私はあなたに未来を見ました。ネージ様は素晴らしい方です。でも、私が直接お使えるのはあなたです。春菜様」

春菜の頭の中にはクエスチョンマークが無数に浮かんでいた。

手を振り解くことが悪い気がして、自由な手と体全体を使って意思表示をした。

「えっえっえーと。お使えるとか、ダメですよ。……よし、友達になりましょう。春菜様なんて言ったらダメですよ」

春菜の様子を見て、ルナスサは初めて微笑んだ。いい顔だと春菜は思った。

「わかりました。では、部屋に戻りましょうか。春菜」

「あ、はい」

ルナスサはすでに立ち上がり、部屋に向ったかつて歩き始めた。春菜もとりあえず元気に後につく。

部屋に戻ると、更に春菜を驚かせることが起こった。春菜が部屋に入ると割れんばかりの拍手で迎えられたのだ。春菜が当惑して立ちずくんでいると、アリスがやってきた。

「ごめんね。私たちが間違っていたんだ」

「えっ、どういうことですか」

続いてカタリーナが近づいてきて言う。

「私たちがここにるのは、皆が幸せになるため。それなのに私たち自身がそれを否定するようなことをしてしまった。春菜の行動が私たちにそれを気づかせてくれたのよ」

部屋で一番身長の高いティファが言う。

「反省室に一週間も入っていたのに、元氣そうで良かった。取り返しのつかないことになっていたら、私たち後悔してもし切れなかった」

アリスが元氣よく言った。

「取り返しのつかないことって何よ。私たちのシーワンでそんなことさせない」

「おう」

部屋中のみんなが春菜の回りに集まって、言葉をかける。そのすべてに好意があふれていた。春菜は、丁寧にもみんなと接する。ルナスサはその様子を満足そうに見ていた。

政府の建設する地域には、一際高いビルを中心に、徐々に低くなるという特徴がある。G A特別地区だったここもその名残があった。中心の高層ビルは上層部が崩れ落ち鉄骨がむき出しになっているが、それでも十分に高い。明るければ、地域全体が一望できるだろう。

「やはり、ここにいらっしやいましたか」

大小のコンクリートの欠片が散乱したビルの最上部に細身のシルエットが浮かんでいた。それに向かい、数倍はあろうシルエットが

話しかけた。

「ルナスサか。久しぶりだな」

ルナスサが近づくと、ゆっくり振り向いた。わずかな光に浮かぶその姿は、暗闇に舞い降りた天使のようだ。

「一年以上も会わなかったことは、出会って以来初めてですね」

「そうだな。すまない」

「いえ、そんなことはありません。お身体は大丈夫ですか？」

「問題ない」

「ネージュ様に何かあれば、私達は路頭に迷ってしまいますよ」

「私は、シーワンをそんな弱い組織にしまったのかな」

ネージュは苦笑した。

「残念ながら……」

「サイレスが居るのにな」

ネージュの声に陰険な部分は全くない。爽快を極めた。ルナスサは、ネージュと話しているだけで、気分が明るくなるのを感じた。

「私を救って下さったのはネージュ様でした。ですが、私が不甲斐ないばかりになかなかお役に立てず……」

「そんなことはない。ルナスサ、前から言っているが、私直属の……」

ルナスサが穏やかにネージュの話を遮った。

「ありがとうございます。ですが、ネージュ様にはサイレス様がいらつしゃいました」

ネージュは何も言わず、ルナスサを見た。

「今日は、ネージュ様にご報告に参りました」

「ん。何だ？」

「第三部隊の春菜をご存知ですか？」

「もちろん知っている」

ネージュは頷いた。

「春菜は私の太陽になるでしょう。正に、運命。正に、奇跡です」
「そうか。そうかもしれないな」

「ネージュ様には以前話した事がございました。私たちは太陽神を崇拜し、一人一人が主を見つけ仕えるのが慣わしです。昔は本家の主が太陽神の象徴でした。ですが、今はもう……」

ルナスサは、一度言葉をとめた。息を整えてまた話す。

「太陽は自ら光り輝き、周りの星々を輝かせます。今の春菜はまだまだ力不足ですが、必ずシーワンの中核を担う存在になると思います。」

「一押しだな」

「はい」

ルナスサの表情に迷いはない。

「そうか。良かった。私では力不足だった」

「いえ、そんなことはありません。私がここにこうしていられるのはネージュ様のおかげです。それからのことは、私の責任です。今度こそ、自らの役割を全うします」

ハッ。ルナスサは殺気に似た強い感情を感じ、とっさにネージュを守ろうと行動にでた。しかし、ネージュは顔に苦笑を浮かべて、首を振った。

「大丈夫だ。ルナスサ」

しばらくすると、その正体が現れた。

「サイレス様」

「なんだルナスサか。久しぶりだな」

サイレスの厳しい表情は一転して、柔和な表情になった。

「ネージュ様。探しましたよ」

「すまない。突然、ここにきたくなってね」

「ネージュ様の行きそうな場所は全て把握していますから、大丈夫です」

「その割には、ここに来るのに時間がかかったようだが」

「すぐに来た方がよろしかったですか？」

「いや、ちょうど良いタイミングだったよ」

「では、私は失礼します」

ルナスサは頭を下げた。

「ルナスサ。表情が明るくなったな」

「はい。主を春菜に決めました」

サイレスは驚いた。

「あの子か……」

「はい」

「不思議なめぐり合わせだな」

「はい」

「やはり部隊に残る気なんだよな」

「はい。全力で頑張ります」

「そうか。お互い、自分の役割に全力を尽くそう」

三人は二人と一人に別れて、その場を離れた。

第四章

反省室に一週間もいたから体が鈍っているのではないか不安だったが、春菜はいつもより体の調子が良いので驚いた。疲れているが、空腹感はある。初めの頃は疲れて食事をするどころではなかった。吐きそうになるのを我慢して必死に食事をしていた。食事が楽しみではなくて作業であったことを思い出す。それが今は楽しみに変わった。御飯の時間を楽しみとして単純な事が春菜は嬉しかった。

食堂にルナスサたちと一緒に向うところだった。トモの呼ぶ声がして、春菜は振り向く。

「トモ小隊長……」

トモは走って来た。

「今日ネージュ様がいらつしやることになった。6時40分には部屋に戻ってきてくれ。迎えに行くから」

トモはかなり興奮しているようだ。他の皆も驚きの声を口々に言う。

「トモ小隊長。大丈夫ですか？」

「あ、ああ。大丈夫、大丈夫だ。久しぶりにネージュ様とサイレス様にお会いして、嬉しくてね。じゃあ、春菜よろしくな」

春菜は形式張った返事をする。トモは満足そうに頷き、トモは小走りに、食堂に行ってしまった。

「では、食事を早く食べて余裕を持って、部屋に戻りましょう」

ルナスサが言うと、皆頷いて、食堂に向った。

席につくと回りにルナスサ、アリス、ユキ、カタリーナがいた。少し前まで、みんなルナスサを避けていたが、今はみんな同じテーブルで食事をしている。少しぎこちなさがあるというものの、すぐになくなるだろう。

「今日ネージュ様に会えるんだ。羨ましいな」

カタリーナが興奮気味に言った。春菜は口に物が入っていたため

頷いた。

「いいわね。絶対びっくりするわよ」

「サイレス様もいらっしゃるかな」

ユキが思い出すように言った。

「たぶんいるだろう」

「お二方、またすごい絵になるんだよ」

「春菜ビツクリして倒れんなよ」

みんな興奮気味に、春菜に対して色々なアドバイスをした。その様子をルナスサは微笑ましそうに見ていた。

春菜は話を聞きながら頷くだけで、手と口は食べることに集中した。春菜が食べ終わるのを見ると、ルナスサが大きくも小さくもない声で言った。

「食器は片付けておきます。先に部屋に戻った方が良いでしょう」

それを聞いてユキもはっと気づいたようだ。椅子から少し立ち中腰の体勢で周りを見渡す。

「トモ小隊長もういないよ。時間はまだちょっとあるけど、早く行って損はないよね」

「でも、食器くらいは……」

「そんな遠慮しないで、食器を片付けるだけだから」

戸惑った顔を浮かべた春菜にカタリーナは右手を手首から上下させて、明るく言った。これ以上はせっかくの好意をダメにしてしまう。春菜は少し照れくさそうに言った。

「ありがとうございます」

みんなはなんだかすごく嬉しそうな顔をした。春菜は手で一時別れの挨拶をし、食堂を出た。

一人で部屋に向う。すでに廊下はだいぶ暗い。人口太陽の微かな光も一日の仕事を終えようとしている。

部屋に戻るとトモはすでに部屋にいた。考え込む様子で窓の外を見ていたが、ドアの開閉の音を聞いて振り向いた。短く切られた髪がわずかに揺れる。顔に表情はなかった。

「早いな。では行こうか」

トモはみんなから好かれている。誰に対しても公正な態度であるからだ。そのぶん特定の親しい友だちや話し相手はいない。みんなの中心にいるか、一人でいるかだ。ふと、春菜はトモに対して孤独な印象を受けることがある。今もそうだった。

「はい」

春菜はドアを開けて待ち、トモが部屋を出るとドアを閉めて後を追った。

「ネージュ様は対話を望んでおられるから、リラックスして意見を言っても大丈夫だ。まあ、遅くなったが入隊式かな。春菜みたいにネージュ様と初めて会う者は7人いる」

トモの声はいつもより熱がこもっていた。シーワンでは誰もがそうだが、ネージュに対して語る時、強い憧憬と敬意がこもっている。「はい。トモ小隊長はお会いになったことはあるのですか？」

「ああ。昔は食事も私たちと一緒に食べておられた。だが、組織が大きくなると忙しくならざるを得ない。今はお会いする機会もめっきり減ってしまった」

トモの顔に残念さが広がったが、すぐにそれは消えた。

「小隊長はシーワンに入ってそんなに長いのですか？」

「そうだな。10年になる」

春菜は心の中で驚いた。なるべく表情に出さないように努力する。だが、突発的に心に浮かんだ好奇心には勝てなかった。

「えっ、そんなに長いのですか？とても若く見えますが……」

友は明快に笑った。

「ハハハ。私はもう30歳を越しているよ」

さすがに今度は驚きを隠せない。

「そ、そうなんですか？全く見えません」

「そうか？ いちよう礼を言っておこう。まあ、第三部隊は若い者が多いからな」

春菜はついつい考え込んでしまう。

「まあ、春菜が第三部隊で最年少であることは変わらないな」

シーワンは、ネージュ直属部隊と五つの部隊である。その中で、一七歳未満の者は第五部隊に配属されるのだ。第一部隊から第三部隊が戦闘部隊になる。第四部隊は後方支援部隊で、食糧供給、医療などなどシーワンを運営するサポート的な部隊だ。食堂管理もこの第四部隊の管轄である。

「よし、ここだ。最初のネージュ様の挨拶が終わったら私は帰らなければいけない。一人で帰れるか」

「大丈夫です。道はわかります」

春菜が元氣よく言くと、トモは頷いた。

「では入ろう」

トモが扉を開き先に入る。

「失礼します」

春菜もトモに続いて部屋に入った。

「明るい」

春菜は思わず声をあげそうになった。部屋の中が光で満ちている。シーワンに入ってからこんなに明るい部屋に入ったのは食物育成ハウスに入った時以来だ。部屋の中にはすでに人がいた。真ん中よりも前寄りに円卓が置かれ、後ろの壁に沿っていくつか椅子が置かれていた。

後ろの席に座っていたソンベンが、立ち上がってやってきた。

「早かったな。良いことだ。春菜、君の席はこっちだ」

ソンベンは少し興奮しているようだった。熱のこもった声で、円卓の席を指す。円卓には九席ある。そのうち二席だけ他の七席と椅子が違った。けっして豪華と言うわけではない。春菜の席はそのちょうど正面だった。

春菜が席につくと、ソンベンは元いた席に戻りその横にトモが座

った。

その後部屋に人が入ってくるたびに、後ろに座っている誰かが立った。ソンベンが春菜を迎えたときと同じように行動する。しばらくして、円卓の二席を除いてすべての席が埋まった。部屋の中は緊張感で包まれ、誰も話しをする者はいない。春菜もなんだか緊張してきた。太ももをつねる。手には汗がにじんでいた。

ガチャ。

音が響いた。全員の背がグツと引き締まる。春菜たちが入ってきた扉からではなく、春菜の目線で左にあるドアが開いた。五人の全身に充実感を携えた男女が入ってくる。その中で一人だけ春菜は見覚えがあった。真ん中にいるのはアルエルだ。

「ということは指揮官たちか……」

春菜は心の中で呟く。五人は空席の前で姿勢をただし、威厳たっぷりに立ちどまった。部屋全体を見渡す視線は鋭い。

全員が息をのむを感じる。五人の指揮官が入ってきた扉は閉められておらず、続いて二人入ってきた。皆が一斉に二人に注目した。そのうち一人を見て春菜は声をあげそうになった。すらりとした長身にブラウンの髪。男はみんなと同じ深緑の服を着ているが、同じ服とは思えない。男は間違はなく、GC地域の通りで春菜がすれ違い追いかけた人物である。もう分かっていたことだが、やはり驚いた。そして、もう一人の人物を見て言葉を失う。

男の横にいるもう一人の人物。透き通るような白い肌、この世の純粋なものだけをみつめてきたような強い光を放つ瞳。男と女ともつかない中世的な容貌で、春菜が出会ってきた誰よりも圧倒的な存在感を持っていた。

春菜は、昔一度だけ見た『月下美人』を思い出した。

「あー、あの人がネージュさんか」誰でも話を聞いていれば一目でわかるだろう。春菜の目線は二人に釘付けになった。いや、春菜だけではない部屋にいる者全員がそうだった。外見の良し悪しが、シ―ワンを支えているわけではない。二人には外見以上に人を惹きつ

ける実力があつた。他の者の追従を許さない。圧倒的なリーダー像を春菜は見ていた。

「まず始めに出席者の紹介からにしようかな」

ネージユは朗らかに言った。声は美しい音楽のように部屋に響いた。

「私の名前はネージユ、シーワンの代表だ。そして、隣にるのがサイレス……」

「サイレス第一補佐官だ」

春菜は二人をずっと見つめた。この場合、ネージユとサイレスに視線を集中させるのは当然のことである。

だが、春菜には二人の姿は目に入っても、声は音楽としてしか耳に入らなかった。よく分からない感情が全身を覆い、涙が出そうになる。それを必死に抑えた。

春菜の人生を変えた者・サイレス。まだ、一度も言葉を交わした事は無い。今、初めて聴いた声。その声は、始めと終わり、全てを春菜に知らせる音のようだった。

ネージユが上官たちの紹介をしている。続いて、入隊者の紹介に入る。ネージユとサイレスが春菜の前にきた。

ネージユと目が合う。ネージユは春菜に穏やかな笑みを向けた。

春菜はぎこちなく笑みを返す。サイレスは、ネージユの横で、無表情に春菜を見つめていた。

「春菜です。第三部隊3隊に所属しています。よろしく願いします」

搾り出すように、平常心を保つように、春菜は声を出した。

全員の紹介が終ると、隊長たちは退出した。退出を確認すると、ネージユは穏やかな口調で、話し始めた。

「まず、謝らなくてはいけないね。皆、申し訳ない。会つのが遅くなった。」

今日は皆に会う機会ができて、心からホッとしているよ」

春菜は、たぶんサイレスに一目惚れした。

初めて、他人に特別な感情を抱いた。
それは、強烈で衝動的な感情だった。

初恋……。

そんな、甘いものではない。

でも恋なのなら、その恋は、今終った。

夢を見る間もなかった、というべきだろう。

春菜は感じていた。自分が他人に特別な感情を抱かないことに……。

いや、特別な感情を抱かないようにしていた、という方が正しいかもしれない。

春菜も、普通の女の子である。みんなが集まって話をするとなれば、悪口・恋話・噂話が中心。そういう話の輪に身を置くことは、良い暇つぶしだった。

幼い頃は、他人を羨む事ばかりだった。走るのが速い子、咲くような笑顔のできる子、勉強のできる子、ピアノが上手な子。自分より、良い部分を持っている人に出会って嫉妬し、嫌いになった。

それが変わったのは、先生に初めて褒められた時だった。全員一人、みんなの前に出て発表をする授業があった。それまでは、グループ発表が中心で、春菜は人の陰に隠れて目立つ事とは無縁だった。

人前で話すという緊張感が、どんなに心躍るものか、初めて知った。その後、春菜は人前に出ることを進んでするようになった。

春菜は人によって態度を変えるのが嫌いだった。それは、人を羨む事への決別であり、特定の個人を特別に思う事の喪失であった。

高校に入り、勉強が中心の生活になると、人前に出るという機会はほとんどなくなった。その時には、すでに自制心が身についており、特別に苦を感じることは無かった。ただ、心のどこかに物足りなさを感じていた。

そして、サイレスが突然目の前に現れる。

本当に一瞬だったが、春菜にとっては永遠だった。

永遠に忘れられないだろう瞬間だった。

春菜は、一生サイレスへの思いを隠すことを決めた。

そして、誰も愛しはしない……。

全てが終ったような、無力感に襲われて、

春菜は一人部屋に向って歩いた。

廊下は真っ暗だと思ったが、薄明かりに包まれていた。

ネージューは、入隊式で『光蘚』の育成に成功した時の事を語っていた。この仄かな光は、半径2メートルほどしか届かない。この光の中で、本を読むことは不可能だが、間違えずに部屋に帰るには十分だった。

力チツ。

「痛っ！」

後頭部に何かが当たったのを感じて、春菜は振り向いた。

そこには、緩やかな黒髪が腰まである、姿勢のやたらいい女性が立っていた。右手は、小石のようなものを振り上げ、顔は笑顔で春菜に向けられていた。

「こんなのも避けられないと、貴方、死んじやうわよ」

春菜は内心ムツとしたが、何も言わなかった。誰かと話す気分ではなかった。

「さつきは、心ここに非ずって感じだったけど、私の名前覚えてる」

春菜は頷いた。どんなに気が乗らなくても、授業の内容を聞き漏らさない訓練が役に立っている。全員の名前は、完全に頭に入っていた。

「第一部隊1隊のエンさんですね」

春菜の声は凜とエンの耳に届いた。

「正解。いい声ね。噂通り、私たちとは雰囲気が違うわね。ネージュー様とも、サイレス様とも違う。さすが、ルナスサに気にいられるだけあるわね。春菜ちゃん」

春菜は久しぶりにイライラした。エンは春菜を挑発している。

「何か御用ですか？」

春菜は平静を装ったが、完全に成功はしていない。普段の春菜を知っていれば、すぐに分かるだろう。ただ、エンは今回初めて春菜と話すため、分からなかった。

「特に用はないけどね。入隊者の中で知っているのは春菜ちゃんだけだったから、声掛けてみたの」

「乱暴な声の掛け方ですね」

「そう」

エンは小石のようなものを遊びながら、とぼけた顔をする。

「相手の力量を知るには結構便利なのよ。怪我をするようなものでもないしね。後ろからこれを投げられて避けられる人は相当訓練を積んでる人だわ」

「そうですね。確かに初対面で、全く情報のない相手を探る場合には、少しは意味があるかもしれない。でも、貴方は私のことを知っていると言いましたね」

「ええ」

「噂で私の事を知ったというなら、私がそれを避ける事ができないということ位、容易に判断できると思いますが」

「確かにそう。でも、偏った情報を鵜呑みにするのは危険じゃないかしら。100回聞く事は、1回見る事に及ばないものよ」

「不毛な議論をする気はありませんが、その理論が人に暴力を振る理由にはなりませんよ」

エンは急に笑い出した。

「えっ？これが暴力？それはちょっと大げさじゃない？こんなこと、日常茶飯事でしょ。自分の身は自分で守る。物心ついた子なら、誰でもわかってのことよ。そうじゃないの？」

春菜はハツと気づいた。イライラして、思いついたことを考えなしに言ってしまったのだ。春菜の考え方と、GDの一般的な考え方に大きな差があることは十分に理解している。だから、春菜は常に興奮せず、冷静に言葉のある程度選びながら皆と話をしていた

のだ。

「エンさんは不意に、悪くもないのに叩かれたら、腹が立ちませんか？少なくとも嫌な思いはするのではないですか？」

エンの顔には薄い笑いが浮かんでいた。

「そうね。でも、殴られるなんてへまはしないけどね」

春菜はエンとの会話に嫌気が差し始めていた。

その思いを察知してか、しないでか、エンは春菜に近づいた。春菜は後ずさりしそうになる自分を必死にこらえた。エンの目には、狂気を含んだ鋭い光が浮かんだ。

エンは春菜に向かい手を伸ばす。

その手は、春菜の首に数ミリで触れる位置で止まった。

春菜の首は、エンの手のひらから伝わる微かな、熱を感じた。思わず、体が震える。

だが、春菜はエンの目から視線を逸らさなかった。

「ワッハッハッ」

エンは急に笑い出した。

「エッ？」

目の前、数センチの所で、急にエンが大きな口をあけて笑い出して、春菜は戸惑った。何が面白いのか、全く理解できない。

次の瞬間、エンは春菜の肩を二度ほど叩き、元の距離に戻った。

「よっぽどバカなのか？よっぽど肝が座っているのか？どちらでしょうね。春菜ちゃん。まっ、貴方程度の人間じゃ、シーワン以外では生きていけないわね」

春菜は体が緊張していて、上手く言葉を発する事ができなかった。

「何とか言いなさい」

エンはそれが気に入らなかったようである。春菜は精一杯、強気で言い返してやろうと決めた。

「シーワンでやっていけると言って頂けて、嬉しく思いますよ」

「言っわね。このガキッ！」

春菜は反射的に頬の前に手をかざした。手に鋭い痛みが走る。手

の甲部分から血が噴出していた。

春菜は、傷口をチラッと見ただけで、表情を変えなかった。腹が立つというよりも、どうでもよくなっていた。

「怒らないのね」

「怒っていますよ」

春菜の声は小さく、いつもよりトーンが少し低かった。

「ただ、怒ってもしかたないと思っています。エンさんと私では考え方があまりにも違いすぎるようですから」

春菜の声は、氷の針のように春菜の耳に突き刺さった。

「ではどうするのかしら？」

「用事がないなら、私は部屋に戻ります」

エンは目を細めた。

「大切な用事が残ってるから、まだ、春菜ちゃんに部屋に帰ってもらっては困るな」

「どんな用事ですか？」

「春菜ちゃんを、殺すこと……」

春菜はため息をついた。

そして、両手を広げる。

「どうぞ」

さすがに、エンは動揺した。

「本気？」

「エンさんが望むなら」

「理解できないわ」

「全ての人が、全ての瞬間に、生きたいと望んでいないということですね」

春菜はエンに背を向けた。

春菜は振り向かず、前に向って進んでいく。

エンは、春菜が見えなくなるまで、その場から動けなかった。

春菜の心は、悶々としていた。

皆に話しかけると、愛想良く会話を返した。だが、愛想がよすぎた。ルナスサは、春菜に違和感を持ったようだ。

「春菜。心ここにあらずと言う感じですね」

他に誰もいなくなると、スナスサは春菜に話しかけた。

「そう？」

春菜の返事はそれだけだ。スナスサは根気強く話しかけたが、春菜は関心を示さず、相槌を打っただけだった。

これにはルナスサは困った。

二人は無言で運動場の角で座る。

手持ち無沙汰になったルナスサは、落ち着かなかった。ルナスサは、自分でもそれを不思議に感じた。

無意識に避けられることの多かったルナスサは、一人で居ることに慣れていた。そうであるにも関わらず、ルナスサは、現在自分の感じている気持ちに戸惑わずにはいられなかった。

居心地悪く、目線を動かす。その目線上に思わぬ人物が現れて、ルナスサの声が上ずった。

「……ネージュ様」

春菜もそれには反応した。

ネージュは片手をあげて応える。

「元気がないようだね。春菜」

ネージュがルナスサに合図をすると、ルナスサは小さく頷いてその場を離れた。

ネージュは春菜の横に座った。暖かい空気が春菜を包む。

「元の生活に戻りたいかい？」

唐突の質問に春菜は、言葉を失った。

ネージュは穏やかな表情で、春菜を見つめていた。

「戻る……。最近考えていませんでした」

「始めの頃は考えてた？」

「いえ……。最初は無我夢中でしたから」

春菜は沈黙した。

ネージユは春菜を待った。

「私……結局、自分の居場所が分からないのかもしれませんが。高校に進んで家を離れて、一番落ち着く場所が、実家だと知りました。おそらく今もそうでしょう」

春菜は目を固く閉じ、落ち着こうとした。

目を開き、ネージユを見る。ネージユの表情は、全てを包み込むような暖かさに満ちていた。

「私には、そんな場所があるのに。なのに……私の心には何もかも捨ててどこかに逃げ出したいという気持ちがあつた。

サイレス第一補佐官が現れたとき、私は非現実を感じたのです。

今、思い出すと、恥ずかしい……。なぜあんな行動をしてしまったのか。シーワンに居ることを後悔していません。でも、シーワンに入ることになったきっかけは、後悔せずには要られないんです。あまりに動機が不純じゃありませんか。事実を変えることはできないんです」

「本心？」

ネージユの問いに、春菜は一瞬体をビクつかせた。

「本心です」

「そう……」

「帰りたいと言えば、帰りたい。でも、帰った後、私はどうするか、どうなるのか、見当もつきません。

シーワンに残りたいといえば、残りたい。

ですが、私がシーワンにいるのは、流れであつて、自分の意志がないからです。皆と価値観の共有ができないことを考えると、怖い」

「春菜」

ネージユは優しく言った。

「深く考える必要はないよ。今、春菜は受け入れられている。その事実で良いんだ。受け入れられなくなったら、その時また考えれば良い。帰りたいという気持ち、それを無理に抑える必要はない。全てを受け入れ、無心で走りなさい。

春菜、今の君にはそれしかできない」

春菜は両手を握り締めた。甲には赤い点があった。

「春菜、その手、どうした？」

「ああ、ちよつと……」

「見せてごらん」

ネージユは春菜の手を取った。

手が発光したような気がした。

「では、春菜。また会おう」

ネージユはまるで幻のように春菜の目の前から居なくなった。

春菜は、手を見つめた。特に変化はないよう用に見える。

そつと甲に触れた。

ハラツ。

カサブタがきれいに取れた。

傷跡が消えていた。

春菜は驚いた。と、同時に、ネージユならと納得してしまった。

カーン。カーン。

春菜は、手の甲を気にしながら、教室に向った。

GAが他の地域と最も違うところは、住宅街を持たないことだ。

GB・GCは住宅街を基本に商業施設、工場、役所など、日常生活に必要な施設は全て整っている。その為、およそ6割の人が生まれた地域を出ることなく一生を過ごす。

GAはあくまでも公の場である。そこで例外的な住居施設が、公邸だった。

クリフの父親もまた一年の半分を公邸で過ごす。公邸には家族とともに暮らす事ができるが、クリフは軍人である為、GB軍区の独身寮に住んでいる。

久しぶりに訪れる、もう一つの我が家は、厳かにクリフを待っていた。緑の生きた塀からは微かに白い建物を見る事ができる。

最初の門をくぐり、十分ほど歩くと玄関が見えてくる。玄関には白いブラウスに、淡いベージュのロングスカートを穿いた女性が立っていた。

クリフは小走りでその女性に近づく。目線がはつきり合うと、足を折り会釈した。

「お久しぶりです。母上」

母親は、厳しい表情を和らげ、笑顔でクリフを迎えた。

「元気そうで何よりです。お入りなさい。お父様がお待ちですよ」

部屋の中にはいると、管理人のセブがやってきて、クリフのコートと荷物を自然に受け取った。

「ありがとう。セブ」

セブは笑顔になった。セブは笑顔になると右頬に小さなえくぼが現れる。

「おかえりなさいませ。クリフ様」

母親は優美な足取りで、階段を登っていた。クリフは一定の距離を保ってついて行く。

「クリフ。何をしたの？お父様、ご立腹の様子でしたわよ」

「……」

「まあ、良いですけどね。お父様の言うことばかり聞いているようでは、大物にはなれませんからね」

「母上は私に大物になって欲しいのですか？」

クリフの声には、嘲笑の響きがある。

「さあ、どうでしょう。私はアレンが大物なだけで十分ですけどね」

「本当に母上は父上を愛しておいでなのですね」

「そういう言葉で言われると、恥ずかしいわね」

母親は180度回って、クリフと向かい合った。クリフは一步前に出した足を引っ込める。

「私は、もう、クリフが何をしようと興味はあるけど、関心はないの。あなたの生き方なので、責任を持って生きれば良いのではないかしら」

「母上は昔から私に甘いですね」

「ふふふ。そうかしら。その割に、クリフは私の事が嫌いだったように感じましたけど……」

母親は、歩き始める。

「反抗期の為でしょう」

「そうね。そういうことにしておきましょう」

クリフの目の前にいる母親は育ての親であり、生みの親ではない。クリフが7歳の時に父親と結婚したようだ。それまで、クリフには母親の記憶がなかった。その為、母親という概念を理解するのに少し時間がかかった。

母親は明るく、活発な人だ。そして、少し変わっている。クリフに母親と呼ばせる為、未だにクリフに自分の名前を名乗った事が無い。

3階の一番奥の部屋につくと、母親はノックし、ドアを開けた。

「アレン。クリフが帰ってきましたよ」

アレンは、オークでできた机の奥にあるソファーに深く腰を掛けていた。

「私は失礼するわね」

母親は、アレンに穏やかな口調で言うと、ドアを閉めて出て行った。クリフはドアが完全に閉まってから、部屋の中央にゆっくり歩いた。

部屋は広いが、置かれている家具は多くない。

「今日は、私の息子として会いに来たのか、大尉として会いに来たのか」

クリフは、膝を曲げてから最敬礼をした。上官に会うときの礼儀である。

「よろしい。意見書を読んだぞ。なぜあんなものを書いた。おかげで、お前を昇格させるのに、反対の者が多くて難儀した」

クリフは、軽く頭を下げてから答えた。その表情から、クリフの本心を読み取ることとはできない。

「恐れながら申し上げます。軍の最大の役割は、国防であると存じます。それを最も脅かす存在がGDのレジスタンスと考え、意見書を提出しました」

「そんなことを聞いているのではない。この意見書は、政府見解と違う部分があるな」

アレンは机を二回叩いた。

「青藍よりシーワンの方をより警戒すべき、という部分でしょうか」
「そうだ。青藍はGDに逃走した軍人で組織されている。青藍が危険なのは、明白だ。シーワンはGDの人間の寄せ集めに過ぎない。そこまで、警戒すべきとは、考えにくい」

「恐れながら、私は今回意見書で、シーワンの不明瞭な点を十分な調査をもとに明確にしました。シーワンの規模は青藍より遥かに大きく……」

アレンは、失望を声色に混ぜた。

「何度も言わせるな。シーワンはGDの寄せ集めに過ぎない。とるに足らない存在だ」

クリフの表情、口調は変わらない。

「今回の調査で、シーワンの活動拠点を断定する事ができませんでした。偵察衛星が5台設置され、ドーム内のことは1ミリ単位で把握できるはずです。それにも関わらず、なぜでしょうか。この事実一つでも、シーワンを警戒するに十分だと考えます」

「軍の保有するGDに関する情報は、8割が偵察衛星によるものだ」
「はい」

「その偵察衛星が、場所を断定できない組織を認めるのか？この意見書には、信憑性がない」

「シーワンは政府の公式見解で存在を認められています」

アレンは思わずため息をついた。

「なぜ、無駄な荒波をたてる。お前は何もしなくても出世が約束された身だ」

「できれば、自分の力で出世したいと思います。親の七光りと影で

言われるのは、面白くありませんから」

クリフは頭を下げた。上官に申し出をするときの姿勢だ。

「何だ？」

上官が意見を聞く意思表示をした時、頭を上げる。

「私をG D調査の任務を与えて下さい」

「何だと！」

「私は知識としてG Dを知っているだけです。G Dが如何なる地か実感したいのです。父上としましても、政府見解に異を唱えた息子に厳しい対応をしたと評価されるでしょう」

G D調査隊の帰還率は30パーセントである。そのため、この任務は左遷または島流しとして認識されている。

アレンは少し考えた。

部屋に沈黙が広がる。

「分かった。そうしよう」

「ありがとうございます」

クリフは足を折り、頭を二回下げた。

「お前、いつからこんなことを考えていたのだ」

「ずっとです」

「そうか、G Dに連れて行きたい者はいるか」

「はい。許されるなら、リン准尉とエドガー少尉を」

「レイは連れて行かないのか」

アレンは軽い皮肉を込めて行った。

「お心遣いありがとうございます。今回は、二人お貸しただければ十分です」

「そうか、分かった。ところで、今日は夕食を食べて帰るのか？」

「いいえ。このまま帰ります」

「母が残念がるな。……だが、その方がいいだろう」

「ハッ。では、失礼いたします」

クリフは頭を下げると、右足を一步後ろに下げた。右足を軸に、アレンに背中を向ける。その後は、扉の前にたどり着くまで、アレ

ンの姿を見ることはない。

アレンは中断された仕事を再開する為に、パソコンの電源を入れた。クリフが部屋を出る前、礼をする為アレンを見たとき、アレンの視線はすでにクリフに注がれてはいなかった。

クリフはそれを当然だと、感じていたし、全く気にしていなかった。

クリフが一階に降りると、セブが近づいてきた。手にクリフのコートと鞆を持っている。

「お帰りですか？クリフ様」

セブを見て、クリフの表情が柔らくなる。

「ああ、気が利くな」

「いえ、あの……」

セブが口ごもると、階段から母親がまるで蝶が舞うように降りてきた。

「クリフ、帰るの？」

「はい」

「せっかく、夕食は一緒に食べられるかもしれないと、思っていたのに」

「申し訳ありません」

母親は、目を軽く伏せ、ため息をついた。

「仕方ないわね。身体には十分気をつけるのですよ」

「ありがとうございます」

クリフはセブから荷物を受け取ると、見送りはいらぬ、と告げ一人で行ってしまった。

母親は、急いで3階に上り、アレンの部屋をノックした。

「お仕事、忙しいかしら？」

「いや、別に……」

アレンはそっけなく応える。

「ありがとう」

母親はそう言うと、アレンの座っているソファの後ろに立った。

そこにある窓からは、屋敷の前面が見渡せるのだ。クリフが足早に歩く姿が見えた。

「本当によく似た親子ですわ」

「そうか」

「ええ……。きつと、クリフも貴方と同様、家柄とか関係なく、自分の力で地位を確立して行くでしょう」

「すごい自信だな。クリフは今度、調査団として、GDに行くぞ」

母親は、さすがに驚いてアレンの方を向いた。アレンは、机の上に浮かんでいるパソコングラフィックスを見ていた。仕方なく、母親は窓の外にまた目を向ける。すでにクリフの姿は見えなくなっていた。

しばらく沈黙して、母親は口を開いた。

「可愛い子には旅をさせろ。ですわね。ここで潰れてしまう子なら、それまで……ね」

一週間後、正式にクリフの元に辞令が出た。それは瞬く間に話の種になった。

「クリフ少佐、GDにいくらしいな」

「ああ、意見書とかだしてGDにこたわっていたからだろ」

「だが、それだけでGDってのは、厳しいんじゃないか」

「いや、意見書って言うのは、公式見解に反対するものだからな。内容に寄れば、それくらいあるんじゃないか」

「19歳で大尉様、21歳で少佐様。出世間違いないと思っていたが、もう、終わりだな」

「まあ、少佐昇格で、最初の任務がGD調査隊だからな。少佐といつてもな」

「それよりも、生きて帰ってこられるかだろ」

「確かにだ。お供は2人だけだろ。それも、評判の悪いクズ。体のいい粛清だな」

嘲笑のこもった目線が、クリフには注がれていた。

クリフは一人、そんな視線を気にする様子もなく歩いている。レイはクリフを見つけると風のようにやってきてクリフの耳元にささやいた。

「クリフ様。どういことですか？」

「何のことだ？」

レイは興奮している。

「辞令のことです」

「ああ、そのことか。ここで話すのは好奇の目が痛いな」

「わかりました。いつもの所でお待ちしてよろしいでしょうか？」

「ああ」

「では、お待ちしています」

レイはクリフの頭を軽く下げ、離れて行った。

仕事が終わると、クリフはGBにある高層ビルの一室に入っていた。部屋に入ると、すでにレイが待っていた。

「早いな、レイ」

「さっそくですが、本題に入ってもよろしいですか？」

レイの表情は厳しかった。

「怖い顔しているな。ああ、もちろんだ」

クリフが座るとレイはいつものようにコーヒーを出す。

「調査団の話はいつ頃から考えていたのですか？」

「一年ぐらい前かな」

「私には一言も話してはいただけませんでした。仕方ないこともありませんが、私は信用されていなかったのでしょうか」

「いいや、違うさ」

クリフは、無邪気な笑みをレイに向けた。

「言ったら、レイはついて来ると言うだろ」

「もちろんです」

「レイを連れて行く気はなかったから、言わなかった」

「どうしてですか？」

「私がこっちにいない間は、レイにはやってもらう事がある。私には敵が多いからな」

「……」

レイはクリフを真っ直ぐ見ている。

「私は帰ってきたら、特進することは間違いないだろう。レイ、手を抜くなよ」

クリフの意志が揺ぎ無いものである事を、レイは確信した。

「わかりました。クリフ様のお留守は、私が、守ります」

「よろしくな」

レイの目にやっと厳しいものがなくなった。クリフはホッと胸を撫で下ろす。

「ところで、調査団がクリフ様を入れて3人というのは、どういう理由なのでしょう？」

「ああ。本当は一人で行きたいのだが、そうは行かないだろう。だから、必要最低限の人数にした」

「エドガー少尉とリン准尉は信用できる人物なのですか？あまり良い評判を聞きませんが……」

「どうだろうな。会った事もないから、分からない」

「嘘をつかないで下さい。クリフ様が考えなく、判断を下すとは思えません」

「ははは、そうかな？」

クリフが自嘲的な笑いを浮かべた。

「今回は身寄りのないもの選んだ。さすがに、他人の人生を台無しにする可能性があるのだからな」

「ですが、危険な任務です。よく知ったものを連れて行かれた方がよかったのでは」

「ははは」

クリフは今度、豪快に笑った。

「レイ。私を見くびるなよ。こんな任務で死ぬとしたら、私などそれまでということだ。知力・体力・時の運。全て揃ってこそ、至高

の座を目指す事が許される」

「ハッ。了解しました」

「では、この話はここまでだ。レイには頼みがある。私がいけない間留守を頼むのは、レイしかないのだからな」

「ハッ」

二人は、穏やかな表情で話を始めた。二人が同じ方向で話を始めた、証であった。

エドガー少尉は金髪に青い瞳を持った、美丈夫だった。身長は、195センチあり、人目を惹く。笑うと哀愁が漂う。さぞ、もてるだろうと、クリフは思った。今年35歳、独身である。

それに対し、リン准尉は寡黙な印象を与えた。黒髪に、黒い瞳。筋肉質な体は、軍服を小さく見せていた。目つきが厳しく、人を寄せ付けない雰囲気がある。リンの身長は198センチである。年齢はエドガーの2つ下、33歳である。

クリフは188センチ。二人なりの好奇の目が、クリフの頭上に注がれた。

「私がスチュワード・クリフ少佐だ。年は下だが、階級は上なので、調査団では私が指揮を取る」

エドガーは始終顔をにやつかせていた。

「たった3人の調査団だ。クリフ少佐」

クリフは21歳の誕生日を迎えると同時に、少佐に昇格した。

「私は今回の任務で、エドガー少尉、リン准尉に特別な事を要求する気はない。私について来いとも言わない。ただ、できる限りの協力を要請するだけだ。よろしく頼む」

クリフは頭を下げた。

それに対しエドガーは、口笛をヒューと吹いた。

リンは、相変わらず無表情のまま、何も言おうとしない。

クリフもさして、二人に興味がなかった。

三人の人生は、今交わったばかりだ。

第五章

ルナスサは誰よりも早く、春菜の変化に気づいた。今までも、愚痴一つこぼさず、訓練に取り組んでいた。だが、その中にも無理はしない、という建設的な春菜らしい考え方を感じる事ができた。

だが、今はガムシヤラで、目には鋭いものがあつた。昼の休憩も、角で座っているだけではない。伸びきつたゴムを集め縄跳びを作り、体力づくりをしていた。それは、不恰好で見るからに飛びにくそうだった。

「春菜それは何ですか？」

「縄跳びです。手作りなので、縄跳びと言ったら、本物に怒られるでしょうか？」

春菜は苦笑した。ルナスサに話しかけられると、春菜の表情は少し柔らかくなる。

「縄跳びとは、何ですか？」

「えーと、縄の上を飛ぶというか、跳ねる遊びでしょうか。持久力をつけるのにいいんです」

「なぜ、その縄跳びをすることにしたのですか」

春菜は即答しなかった。縄跳びを続ける。ゴムの不規則に回る音が、二人の間に広がる。

「……私、甘えていた、と思ったんです。ここに来て、皆が私という存在を認めてくれて……でも、現状で私の能力がシーワンでどれほどの役に立つか考えると、ただの足手まといにしかないじゃないですか。それでも、なおかつ、シーワンという組織が、私の存在を認めてくれるのなら、私はもっと努力しなくてはいいけない」

「春菜……」

ルナスサは、一度目を伏せた。

「春菜は恒星と惑星を知っていますか。私の一族が拝している太陽は、恒星です。自ら光を放つ。それに対し、惑星は太陽の光を反射

して光を放ちます。どちらも、美しく光輝く事ができます。でも、役割が違います。春菜には春菜の役割があります」

春菜の額から一筋の汗が落ちた。

「ありがとうございます。でも、今できることを精一杯する事が、私のためになると信じているんです」

「わかりました。では、私と組み手もやりましょうか？」

「組み手？」

「そうです。春菜は自衛の技術がまだまだですからね。お手伝いしても良いですか？」

「良いの？」

春菜の目は輝いた。春菜自身、格闘技の心得が全くない事に不安を感じていたからだ。危険に出会ったとき、ただ、守られるだけの存在でいたくなかった。

「もちろんです。それに、春菜が縄跳びというのをやっている姿を見ているより、私にとっても、有意義ですから」

ルナスサは、ゆっくり立ち上がりながら言った。

「構えを大切にしない人がいますが、それはいけません。構えで相手の力量はわかりますからね」

ルナスサは、胸の辺りで手を一度合わせた。そして、空気を吐き出すように、広げる。右手を前方に、左手を後方に動かす。それとともに、重心が下がって行く。

それは、ゆっくりだが、空気が振動しているのを感じる。春菜は、縄跳びをやめざるを得なかった。

「すごい」

春菜は動けなくなる自分に気づいた。

「構えをし、最初にだす一手が全てを決めるといっても良いでしょう。ですが、大抵の場合は、真正面から対峙することはないですね。基本からしっかりやりましょう」

ルナスサが笑顔になる。すると、緊張の波は一気に消えた。

「さあ春菜、はじめましょう」

「はい」

こうして、春菜の休憩時間の日課は、縄跳びと、ルナスサとの組み手になった。

ルナスサは春菜に毎日言った。

「春菜は、一日、一日、成長していますよ」

ルナスサは、春菜が心にあるぽっかり空いた穴の存在に気づいた。それを埋めるように、春菜は無理をしようとする。

なぜだろう？ルナスサにはわからない。

ただ、ルナスサは春菜を助けたいと思った。不器用な生き方をする春菜に、ルナスサは一日一日、惹かれていくのだった。

白い天井、白い壁、白い机、白に溶け込む様に、ネージュは机に向っていた。

ポログラフイーには、論文が映し出され、ネージュはゲームを楽しむ子供のような表情で、それを真剣に読んでいた。

トントン。

ノックの音が響く。ネージュは視線を動かさずに、応えた。

「開いている」

部屋に入ってきたのは、サイレスだった。

「また、あの論文を読んでいるのですか？」

サイレスは、苦笑交じりに言う。

「よく分かるな」

ネージュは顔を上げず応える。

「ネージュ様の表情を見ていればわかりますよ」

「そうか？ スチュワード・クリフ、政府軍総司令官の一人息子が19歳の時に書いた論文……これを読んだ時は、驚いた。良く分析したことだ。推量も含まれているが、なぜそこが推量にならざるを得ないか、はつきり述べられている。実に明快な論文だ。だが、この論文が政府方針を動かすことはなかった。というか、無視されてい

た。この論文の件が再度話題に上ったのは、彼の少佐昇進を論議する場だ。もちろん、負の判断材料だがね。軍でこれだけ、我々の事を認識している者がいるというのは、やはり世の中が上手く作られているということだろうか？」

「スチュワード・クリフは無事少佐になったようですね。軍のタブー政府見解に反論して昇進というのは、どのように捕らえるべきでしょう。どちらにしても、彼の場合は、父親の力でしょうが」

「現段階ではこの論文が、無視され続けているが、彼は間違いなく幹部になるだろう。その時には見逃してくれないだろうな。だが、その時まで、待つ必要はないな」

ネージユは顔を上げた。

シーワンでは、コンピュータで管理された情報は、どんなに機密情報でも手に入れる事ができる。クリフはそれをよく承知していた。そのため、GD調査団についてのデータは一切コンピュータ上に載せていない。発表についても、極めて異例の書面で行なっている。更に口外を禁止し、違反者には厳しい処分を与える旨を同時に公表した。

チャットや掲示板にそれらしきものが入力されようとした段階で、ウイルスを流す体制をとり、パソコンそのものを破壊した。この辺りの過激な対処は、クリフとレイが個人的に行なったものである。

そのため、ネージユのもとにクリフがGD調査団の情報は全く届いていなかった。

「組織編製の準備は順調か？」

「はい。明日、一斉発表・通知を行います」

「第一から第三部隊の各小隊に最低一人は第四部隊経験者を入れたい。そのためには、これから定期的に部隊間移動を行ないたい」

「そうですね。どの部隊でも応急処置は必須ですが、浸透しているとはいえません。変化に対応する能力を身につけるためにも、良いと思います」

「それにしても、気になるんだよなあ」

「スチュワード・クリフのことですか？」

「ああ。喉の奥に何か刺さっているような、すっきりしない感じに似ている」

「その割には嬉しそうな、表情に見えますが……」

「そうか……？」

「ええ、好敵手の出現を喜んでいるようにも思われます。不謹慎ですが……」

「本当に不謹慎だな。彼が、話の分かる人物であることを願っているんだ。結局、この争いでは、必ず人の命が奪われるのだから……」

「どんなに美辞麗句を並べても、正当化されるものではないかもしれません。ですが、誰かが、行なわなければ、状況は永遠に変わらないのです。ネージユ様は、犠牲を最小限にする努力を怠らないでしょう。ですから、私はネージユ様の見方ですし、ネージユ様の見方を増やす為に惜しむものは何もありません」

「私が、私を信じられなくなったら、終わりだからな」

ネージユに迷いはなかった。自分のやるべきことは、全て分かっている。だからこそ、その瞳に激しい炎が宿り、人を惹きつける事ができるのだ。

サイレスもまた、自分の役割を迷うことはない。だが、他人である以上、100%の意思疎通が不可能である。そこに、多少の不安があった。

翌日の、組織編制は大々的なものだった。春菜は第四部隊第1小队へ異動となった。

トモは第三部隊で中隊長になる事が決まった。カタリーナとティファは第二部隊へ異動。アリスとユキ、そしてルナスサは第三部隊に残る。

「トモ小隊長、いえ、中隊長おめでとうございます」

部屋に戻ると、まず皆はトモを迎えた。さすがのトモも照れていた。

「皆、ありがとう。この部屋の皆も、来週からバラバラになる。寂しく感じる者もいるかもしれない。だが、忘れないで欲しい。」

私たちがシーワンの一員であることになんら変わりはない。

私は中隊長として、同じ目標に向って、与えられた役割を精一杯する。皆にもそうできるような環境を整えるよう努力する。頼りない中隊長かもしれないが、皆、これからも、よろしく頼む」

部屋が割れんばかりの拍手に包まれる。春菜も手が真っ赤になるまで手を叩いた。シーワンに入ってから、一番お世話になったのがトモだろう。そのトモと別れると思うと、寂しさがこみ上げてくるのは仕方がなかった。

「トモ中隊長。お世話になりました。そして、これからもよろしく願います」

「春菜は、第四部隊だったな」

「はい」

「とても重要な部隊だ。春菜には向いているかもしれない。頑張るんだぞ」

「はい」

トモは、優しく春菜に話しかけた。春菜一人がトモを独占するとはできない。春菜は頭を下げて後ろに下がった。

ユキが話しかけてきた。

「春菜も動くんだよね」

「こういう編成ってよくあるんですか？」

「よくはないよ。でもやっぱり、部隊ごとに仕事が違うから、合う合わないがでてくるじゃん。それについての異動はよくあるね」

カタリーナが近づいてきた。

「春菜は癒し系だから、第四部隊はピッタリかもな」

「まあ、お互い頑張りましょう」

「そうだな。自分の為、シーワンのために」

正式に異動が開始されるのは、一週間後だが、中隊長、小隊長は引継ぎがあるため、忙しかった。

「春菜と部隊が分かれてしまっなんて、残念です」

春菜とルナスサは、いつものように組み手をしていた。春菜の動きは左右に加え、上下の動きも俊敏さを増してきた。

「本当に……。休憩時間が合えば良いのだけど……」

ルナスサの呼吸は全く乱れていない。それに対し、春菜の息はあがっている。

「第四部隊は、食堂の管理がありますからね。ローテーションで休憩を取ります」

「でも、私……。自分からこの時間に休憩にしてください。なんて、我ままいえませんか……運に任せるしかないですね」

「怒っていますか？春菜」

「怒ってませんよ。なんで、怒るんですか。だって、前線部隊より後方部隊のほうが、私に向いています。ただ……」

「ただ？何ですか？」

「ただ、何と言うのかしら……。不安なだけです。期待もあるのですが……。新しいことを始める時って、いつも複雑な気持ちになるんです」

「春菜は、考えすぎですよ」

「そうですね……。考えても仕方ないことの方が、多いんですけどね。持って生まれた性分というか、癖ですね」

カーン。カーン。

二人はゆっくりと動きを止めた。春菜は額の汗を拭った。大きな滴が、地に落ちる。

「春菜、行きましようか」

「はい」

二人は教室に向った。

春菜は第四部隊の第三隊に決まった。運良く、休憩時間は一時から二時で変わらなかった。

第四部隊は訓練が少人数制で、第三部隊とは全く違う形でハードだった。第三部隊では、実際の戦闘に備えた訓練であった。だが、第四部隊の医療・補給という任務は、実践と隣りあわせだった。朝昼晩の食事の準備、片付け。安全衛生に関すること、全てを第四部隊がフォローする。

莫大な知識を必要とされ、作業と作業の合間に叩き込むように授業が組んであった。

第四部隊の皆は、いつも走っている。春菜も、いつもつんのめる様に走っていた。考える余裕のない忙しさである。だが、そこには気持ちのよい爽快感があった。

周りを見渡せば、皆の表情も穏やかだ。

「春菜。疲れていますか？」

ルナスサは春菜に聞いた。

「疲れた顔してますか？」

春菜は右手を鋭く出しながら、穏やかな表情を浮かべていた。

「いいえ。充実しているようですね」

「はい。体がこんなに動くななんて……嘘みたいです。病は気からって言うけど、なるほどです。私にとって、最もよい環境というのは、頭と身体がフル回転することなんです。どっちか一方だと、中途半端で疲れを感じてしまう。バランスが大切なんです」

春菜の足が風のように、ルナスサの膝に向った。それは、ルナスサが受身を取るより一瞬早く、到達する。ルナスサは、バランスを崩し倒れそうになるが、さすが達人。その反動を活かして、春菜に一撃を試みた。春菜は、瞬時にそれを見分け、後方に下がった。

「春菜、上達しましたね」

ルナスサの表情は柔らかく、満足そうである。

「ルナスサのバランスが崩れたの初めてですね」

春菜は、自慢げに言った。

フラッ。

春菜はよろめいた。驚いて、壁にもたれかかる。

「アレレ……」

ルナスサは、すぐに春菜の脈を取り、額に手を当てた。

「脈が速いですね。熱は、大丈夫でしょう。一気に集中力が増したために、貧血状態に鳴ったのでしょうか。休憩はもう少しあります。休みましょうか」

春菜は目の前が軽く暗転するのを感じた。たいした事はない。

急に立った時、ふらふらする事がたまにあるだろう。その程度だ。だが今日は、成果もあった。春菜は、無理をしないことにして、座った。

春菜は、充実していた。

シーワンの中で、一日に移動する距離が最も長いのは、サイレスだ。もしかしたら、ドーム内で最も長いかもしれない。

ネージュとサイレスが実際に会う事は、一週間に一度程だ。二人は互いの意志が共通の目標に起因し、共通の行動を導き出す確固たる自信があった。

だから、ネージュは迷わない。

いつ自分がこの世界から追い出されても、シーワンだけは守り抜く。

ネージュはベッドに横になり、点滴を受けていた。点滴は、ゆっくりと時間を食いつぶす。ネージュはこの時間が嫌いだった。点滴より、時間的に早い治療方法はいくらでもあるが、一番副作用の少ない方法がこれだったのだ。

最後の一滴が体内に入ると、ネージュはむしりとる様に、針を抜いた。

「まあ、乱暴ですね」

切れ長の目に、メガネをかけた女性は、子供のいたずらをみつめる、母親のような瞳で、ネージュを見た。

「これをしていると、静か過ぎて反対に考えがまとまらなくなる」

「あら、ではネージユ様の唯一の弱点は、点滴ですね」

ネージユは腕枕を解き、ベッドから起き上がった。

「最近体調が良い。気のせいじゃないか？」

「はい。気のせいではありません。どのデータも落ち着いています。当分は、点滴さえしていれば大丈夫でしょう」

「そうか。良かった。こういう時、考えてしまうな。私は幸せなのか？不幸なのか？」

「それは、ネージユ様がお決めることですな」

「そうだな。十分長生きはしているしな。シーワンも私がいなくても、十分機能するまでに、その時間はかからないだろう。この身体のおかげで、大切なことを後回しにしないですむ。捨てる神あれば、救う神ありだな」

「そんな、自虐。ネージユ様には似合いませんよ」

「そうかな？そうだな」

ネージユは下に向けてばかりの視線を、上に向けた。部屋を満たしつつある甘い香りに気がついた。

「良いにおいだな。すごく、懐かしい感じがする」

「アップルパイを焼いたんです」

「アップルパイ！」

ネージユは驚いた。

「そんなに驚かなくても。今日はサイレスが来るというから、アップルパイを焼いたんですよ。もうそろそろ、できる時間ですね」
ドーン。

壁に何かが衝突する音がした。

「まあ、グッドタイミング。サイレスね」

女性はドアを開けた。

サイレスはノックをしようと手を上げたところだった。手持ち無沙汰になった手を下げ、部屋に入る。

「ノーグ先生。お久しぶりでございます」

サイレスは、ノーグに頭を下げた。優美な動きである。

「よろしい。さすが私が教えただけはあるわね。さあ、中に入りなさい」

「失礼します」

サイレスはネージユのもとに行った。

「調子はいかがですか？」

「ああ、調子が良い。当分問題ないだろう」

「そうですか。よかった」

サイレスは穏やかに微笑むと、ノーグの方を向いた。

「ケーキをお焼きになったのですか？」

「アップルパイを焼いたの。サイレスお茶を淹れて貰って良いかしら？」

「はい」

サイレスはノーグについて部屋を出る前にネージユに声を掛けた。

「少しお待ちいただいてよろしいですか？」

「ああ、もちろんだ」

ノーグは生まれも育ちもGDだが、その生活スタイルはGA階級に勝るとも劣らない。GA特別特許地区以来の研究者の一族である。それも、ノーグは最後の末裔であった。放射能汚染は遺伝子に深く潜り込み、寿命と生殖能力を何世代にも渡って奪い続けたのだった。10分ほどすると、ノーグとサイレスは戻ってきた。ノーグは出来立てのアップルパイを抱えていた。サイレスの持つお盆の上には、ポットとコップ、お皿が見える。

ネージユは居心地悪そうに、椅子に座っていた。

「ネージユ様は良いのですよ。そんな拳動不審な態度、外でしていいいでしょね」

ネージユは微笑むしかなかった。ただ、その表情に卑屈なモノはない。

「さーで、準備が出来たところで、私はお暇しましょう」

「ノーグ先生！」

サイレスは、三つ目のコップを持ったところだった。

「ネージユ様がいる間、ここを離れられなかったでしょ。サイレスが来てくれた事だし、少し出かけてくるわ。ネージユ様。よろしいですか」

「ああ、もちろん」

「では、失礼します」

ノーグは、部屋を出て行った。

「気を使う方だな」

「はい」

ネージユはアップルパイを口に運んだ。仄かな甘さとリンゴの食感が心地よく、口に広がる。紅茶を飲むと、絶妙に喉に溢れた。

「おいしい」

ネージユは素直な感想を述べる。サイレスは、穏やかに頷いた。

「私はノーグ先生にお茶の入れ方を教わりました。忙しい中に、心休める方法を知る事が、後悔しない判断を導くのだ。」と

「そうだな。でも、その割りサイレスは私の心休める時間を奪うな。私はサイレスと心を砕いて話をするのが、一番大切だと思っているのだが」

「すみません。私の我ままです」

「分かっているさ。私もそんなことでは負けない。さて、今日はサイレスにお願いがある」

部屋に広がっていた穏やかな空気に、緊張が走った。

「私は春菜を気に入っている」

「……」

「だが、彼女は決定的に経験が足りない。GDの事など、何も知りたくない」

「……」

「そこで、だ。春菜を青藍への使者にしたい」

ネージユはサイレスを真っ直ぐ見た。サイレスはネージユの瞳を見て、頷く。

「まだ、早いという気もしますが、いつがちょうど良いともいえま

せんし、反対はしません」

「星輝なら春菜がGDの人間じゃないと知っても、問題ないだろう」
「一つよろしいですか？」

「何だ」

「確認したいのですが、春菜のどこに魅力を感じていらっしゃるのですか？シーワンに人材は多いですが……」

「ルナスサが信じたところ」

「……」

「そして、あの適応能力。サイレスを追いかけて、シーワンに突然入ったにもかかわらず、全く根を上げる様子もない。

会って、春菜が恐ろしく冷静な子だと分かった。目を見たときは、死んでるんじゃないかと思ったよ。

何でシーワンにいるのか、偶然が重なった出来事だが……まあ、考えても仕方ないな」

「不思議なのは、家族に対して強い愛情を持っている割に、行動にそれがでないところですね」

「親離れが、適切な形で出来ていたのだろう。大切にすること、依存することは、行動に表した時、同じような表現になることはあっても、全く違うだろ」

「なるほど」

「春菜が青藍に行く時は、上を通って行くようにしてくれ。下を通ってしまつては、意味がない」

「上は、荒地で暴獣がです。それに、下に比べて、3倍は時間が掛かりますが」

暴獣はGDに捨てられた人に害を及ぼす動物のことである。遺伝子組み換えにより誕生したキメラも含まれている。

「サイレスならともかく、春菜にとっては、その方が勉強になるだろう。下で安全な道を使う方が、無意味な時間を過ごすことになるさ。だが、サイレスには申し訳ないが、初めて行く時は、春菜と一緒に行って欲しい」

「分かりました」

「一回だけでいい。その後は、ルナスサと、アチェリの3人で行ってもらおう」

「アチェリは今任務でシーワンを離れていますが」

「そろそろ帰ってくる頃だろう。一回目は間に合わないだろうから、ルナスサと3人で行ってくれ」

「はい。承知しました」

「暴獣もいることだし、十分に気をつけてくれよさて、次だが……」

二人は、テキパキと打ち合わせを続けた。本気のキャッチボールを見るように、速く、重く、確実に、会話をする。

春菜は走っていた。一緒に走っているのは、同じ隊で同じ部屋のジユリとドンウである。シーワンでは、走るな。と言われる事はない。なぜなら、走ることで人とぶつかる未熟者はいないし、無駄な音をたてる者もないからだ。動きに無駄はなく、サバンナを駆ける野生動物のようだ。

春菜にもその動きは、しっかり身についていた。

「春菜」

その呼びかけに、春菜は寸分違わぬ機敏さで振り向いた。

「はい。ソウタ小隊長」

「サエコ指揮官が呼びだ」

春菜は驚いた。ジユリとドンウも驚いた。隊の性質として上下関係が非常に厳しい。指揮官が、一兵卒である春菜を名指しで呼ぶというのは皆無に等しいことだった。

ネージユは、割とどこにでも現れ、誰とでも親しく話す。食事をともにすることもある。ネージユの場合は、シーワンの指導者であり、象徴といふべき存在で、役割がまた異なるのだ。

「今ですか？今から、また訓練があるのですが……」

「何、寝ぼけたこと言っているんだ。そんなことは分かっている。」

指揮官が呼びなんだ。後で、補講する」

ソウタは生真面目で、口調は厳しくなる事が多い。それでも皆が、ソウタに信頼を寄せているのは、自分にすごく厳しく、他人に厳しく、を実践しているからだ。

「はい」

春菜は、とりあえずジュリとドンウに「よろしく」と言って、ソウタについて行った。

ソウタは指揮官室の前で停まり、ノックをした。中から入るように、と声がする。

「失礼します」

ソウタに続いて、春菜も部屋に入る。部屋は薄暗く、部屋に唯一ある机は、机というより、少し大きめの作業台のようだった。

「春菜を連れてきました」

「ソウタ小隊長、ありがとう」

ルナスサには及ばないが、大柄の女性である。髪は短く刈っており、表情に優しさがなかったら、近づきがたい雰囲気だっただろう。

「では、私はこれで失礼します」

ソウタは、キビキビとした動きで、部屋から出て行った。

「春菜と直接話すのは、初めてだね」

「はい」

「そんなに緊張しないでいいよ」

サエコは苦笑した。頬にえくぼが浮かぶ。

「まあ、さっそくだけど、春菜は直属部隊に異動だ」

「……直属部隊！」

春菜の表情が歪む。あまりに思いも寄らないことで、どう反応して良いか、迷った。

「そうだ。まあ、春菜の任務は、2、3ヶ月に一週間ほどだから、第四部隊の訓練は平行して行なえる」

「？」

「特殊部隊は、ネージュ様から直接任務を与えられた者の総称なん

だ」

春菜は黙って聞いているだけだった。それを見て、サエコは苦笑する。

「ここに来てから、何も聞かないのだな。貴方自身のことではないのか。受身ではダメだ」

サエコの鋭い声が、春菜に届く。

「はい。すみません」

「はい。すみません？その言葉で、貴方が得られた情報は何か？」

春菜は当惑していた。シーワンの組織について、まだ完全に理解しておらず、また理解する努力を怠っていたことを改めて、思い知らされる。

「私の任務は何でしょうか？」

「声が小さい。目上の者に対する礼儀が感じられない。何より、優美でない。やり直し」

サエコは真剣だった。

春菜は、深呼吸をした。

「私の任務を教えてください」

春菜はサエコの目を真っ直ぐ見た。逸らす気配を全く感じさせない。堂々たる姿勢である。

声は、朗々と響いた。空気は一瞬にして透明感を増し、耳に届くまで遮るものはない。

サエコは感心した。さすが、ネージユの指名だけの事はある。

「よろしい。春菜の任務は『青藍』への使者だ」

青藍……春菜は言葉を反芻する。名前はすぐに既存の情報にぶつかった。

まだ、GDに来る前、青藍の名前を耳にした事は、シーワンより遥かに多い。軍人がGDに逃走して作ったレジスタンスである。過激デモ、テロ等、社会悪の根源全てに関わっているとされている。

「ネージユ様はGDが一丸とならなければ、政府と戦うことは出来ないと考えておられる。我々と青藍のやり方は全く違うが、考え方

が異なる分、蜜に連携をとっていなければならない。今まではサイレス様が、任を果たされていたが、春菜が引き継ぐことになった」
「私はシーワンに入隊してから日浅く、その様な重大な任を与えられる理由を教えてください」

「そう謙遜しなくても良い。ネージユ様より直接のご命令だ。これより一ヶ月、通常の訓練とともに使者としての礼儀を学んでもらう。また、任務については、ネージユ様より直接お話があるだろう」

「はい」

「春菜。訓練は苦しいか？」

「いいえ」

「そうか。どんな苦境に立たされても、なお、前に進もうとする姿に人は励まされる。春菜、頑張りなさい」

「はい」

春菜は頭をさげた。

心の中にモヤモヤしたものが溢れている。春菜は自分を優秀だとは思っていない。どちらかというと、小心者でいつも失敗を恐れている。

また新しい事、重要な任務を与えられたとなると、不安だった。

（私は、私のできる範囲でしか、頑張れない……）

「厳しい顔をしているな」

音楽的な、美しい声が春菜の耳に飛び込んできた。春菜は反射でその声の主を探す。

振り向くと、ネージユが微笑んでいた。

サエコは一礼した。表情が一気に明るくなった。

「サエコ指揮官。ノックもせずに勝手に入ってすまない」

「とんでもありません。ネージユ様」

「サエコ指揮官に届けるものがあってね」

ネージユはサエコに一センチほどのチップを渡した。サエコはそれを腕につけたベルトの中に滑り込ませる。

「実用には、もう少し適応範囲をあげないと難しい。私なりに改良

を加えたが、サエコ指揮官に引き続き、開発を頼む」

「了解しました。全力で取り組ませていただきます」

サエコの関心がネージユの持ってきたチップに急速に向けられていった。

ネージユは微笑む。

「春菜、こつちへ」

ネージユは春菜を一室に案内した。

そこは白を基調とした部屋で、サエコの部屋とは印象がかなり異なっていた。

「座って」

春菜は、首を振る。

「いいえ、私は……」

「私は立って話すのが好きではないのだよ」

ネージユは穏やかな表情で春菜を見つめている。

「ありがとうございます」

春菜は、ネージユの指す椅子に座った。

「私に聞きたい事があるだろう」

「はい」

春菜は一呼吸置いて、尋ねた。

「どうして私を使用者に選んだのですか？」

「春菜が適任だと思ったからだよ」

「私が……ですか。私は自分が過大評価されているように、感じています」

「ハハ。そうか？では、私は春菜が自分を過小評価しているように感じるな。春菜は高い資質を持っている人間だよ。それは、しっかり使わなくてはいけないね」

春菜は戸惑った。

「だが、この任務はただそれだけじゃない。もう一つ目的があるんだ」

「目的ですか？」

「そうだ。春菜はGDの事をまだ知らない。シーワンの外に出たことはないからね。GDはもともと人の住むような環境ではないし、暴獣との戦いも死活問題だ。春菜はそのどれ一つも経験していない。それでは、シーワンの一員として、あまりにも頼りないんだ。だから、今回の任務は春菜の世界を広げる為にも、必要なことなんだよ」

「私にここまで気をかけて下さり、ありがとうございます」

「一回目は、サイレス、ルナスサと一緒に行ってもらう。サイレスの使者としての態度、判断力、しっかり学びなさい。二回目からはルナスサとアチエリと一緒に行ってもらう。サイレスにせよ、アチエリにせよ、忙しいから、任務まで会えないが、春菜が任務を遂行する上では、なんら問題はない」

「はい」

「春菜」

「はい」

「春菜は、私をどう思う？シーワンのネージユをどう思う」

「聡明かつ、偉大な指導者と考えています」

ネージユは苦笑した。

「私は、春菜に望む事がある」

「はい」

「強く、激しく、なお聡明であれ。」

春菜には、そういう生き方をして欲しい。私の我ままかもしれないけれど、願っているよ。春菜が懸命に生きてくれることを」

春菜は複雑な気持ちがした。

「すみません。一つ伺いたい事があるのですが……」

「どうぞ。何でも聞いてくれ」

「シーワンは、本当に政府と戦う、戦争を起こすのですか？」

ネージユの表情に変化はなかった。春菜の問いを予想していたようだ。

「それは、避けられないだろう」

春菜の表情が厳しさを増す。

「訓練を受けていて、これが戦争を行う為のものであると分かっています。ですが、戦争になれば死傷者が必ず出ます。本当に話し合いで解決できない問題なのでしょうか？」

「春菜は戦争がどんなものであるか、知っているのか？」

「知識だけです……旧国家史を選択していました」

「それは珍しいな」

ドーム内に住むようになってから、戦争は起こっていない。あったのは一方的な弾圧だけだ。

「では、なぜ戦争が起こらなくなったか、分かるか？」

「政府には矛盾も欠陥もありますが、先進思想が浸透し、戦争がいかに愚かな行為であるか認識、立証された為です」

「教科書通りの答えだな。だが、それは詭弁だ。ならばなぜ、政府は軍隊を持っている。軍隊の目的は一つだ。実際、軍隊は形だけでなく、活動を行っている」

「あともう一つ、戦争の出来ない理由があります」

「何だ？」

「ここは密封状態です。戦争ではおびただしい粉塵が生じるでしょう。浄化設備がそれに対応できるのか。難しいと思います」

「そうだな。その意見の方が、現実的だ」

「ならば、話し合いによる解決の可能性はあるのではないのでしょうか？」

「政府が我々の話を聞こうとすれば、それに越したことはないよ。では、こうしよう。春菜に一年あげる。その間に、政府と話し合いの糸口が少しでも見出せたら、春菜の意見に耳を傾けようじゃないか」

「一年……ですか？」

「短いと感じるだろうね。だが、青藍には多少なりとも政府とつながりがある。一年あってできないことは何年あっても、できはしないのだよ」

「分かりました。ありがとうございます」

ネージユは、可憐かつ、幼さの残る、笑顔で春菜に応えた。

翌日から部隊の訓練は、巧妙に組み替えられた。春菜はほとんどジャオイボックス（個人訓練シミュレーションマシン）で訓練が行なわれるようになった。

ジャオイボックスは90×180×180センチの直方体で、プログラムは隊列、戦闘、救護などあらゆる実践を体験する事ができる。また、個別教育システムでは、あらゆる分野の通信教育の受講から資料検索もできる。

春菜はあまり気乗りがしなかった。第四部隊の訓練の方が自分には向いていると感じていた。もちろん与えられた課題に手を抜くことはない。

だが……。

春菜は自問自答した。なぜ、自分はここにいるのだろうか。決して、望んだことではない。考えても答えなど出てくるわけではないから、いつも考えないようにしている。それでも、やはり、忘れることは出来ない。

春菜は時々思った。

何も感じない存在であれば良いのにと。

そうすれば、こんなモヤモヤした気持ちを抱えることなく、生きていられるのに。

そして、ついに出発の日を迎える。

春菜はその日いつも通りに起床し、農作業を行なった。朝食が終ると、部隊から離れ、部屋に戻った。準備万端のバッグを抱え、体をすっぽり覆うローブを被った。

部屋を出るとき、部屋に一礼をした。

「いってきます」

小声で、誰もいない部屋に言う。

部屋を出ると、誰とも会わないように注意して、ネージユの部屋に行く。

部屋の前にはルナスサがいた。

「おはようございます」

「おはようございます」

「では、行きましょうか」

春菜は頷いた。

ルナスサがノックをした後、ドアを開ける。ドアは、ゆっくりと開いた。

部屋にいたのは、一人だった。

春菜は思わず息を呑む。

サイレスの髪は以前見たときより、少し伸びていた。心の準備は出来ていたはずだが、やはり鼓動が早くなった。

春菜は視線を逸らすことで、どうにか動揺を抑えようとする。

「サイレス様、おはようございます」

「おはようございます」

ルナスサに続いて、春菜もサイレスに挨拶した。意識しなくなっても、どうしても意識してしまう。

「ああ、おはよう」

サイレスは素っ気無く応えた。

「では、行こうか」

「はい」

今度はルナスサと春菜の声同時だった。

サイレスが机の上のタッチパネルを叩くと、床がきしんだ。

貼り付け後など全くなかったのに、床が口を開く。そこには階段があった。

「開いている時間は一分だ。速く」

サイレスが言うと、ルナスサが飛び込み春菜も続いた。サイレスが階段を駆け下りてきたと同時に床はゆっくり閉まりだした。

床が完全に閉まると、一瞬真っ暗になる。しばらくすると、目が

慣れてきて、様子をはつきり見る事ができるようになった。光鱗が壁一面に生えていた。

空間の広さは、ルナスサの体がどうにかギリギリどこにも当たらず、歩けるほどだ。

サイレス、春菜、ルナスサの順番で歩いた。

誰も話そうとしないので、春菜は周りを注意深く観察した。途中、分かれ道があったが、サイレスは迷うことなく進んでいる。

トンネルはコンクリートで固められているようだが、所々ヒビが入っていて、崩れていた。そこに代わりのように光鱗がびっしり生えていた。

空気は思ったより澄んでいて、体は疲れる気配がしない。すでに3時間以上歩いている。春菜は歩くことは苦痛でなかったが、無言で歩き続けることに、違和感を覚えていた。

通路は徐々に広くなっているようだった。さらに進むと、3人が横に並んでも十分な広さになっていた。

サイレスはゆっくりとスピード落とし、立ち止まった。時計を確認した。

「思ったより早く着いた。少し休もうか」

すでに歩き続けて6時間が経っていた。春菜は少し疲れていたが、サイレスとルナスサは息一つ乱れていない。

「春菜。疲れていませんか？」

「大丈夫です。急がなくても良いのですか？」

「場所を特定されない為に、外に出るチャンスは一日に二回しかない」

「偵察衛星が常に巡っているのです。死角となる時間は一回5分しかありません」

「補給をしておいた方がいいだろう」

春菜とスナスサは頷いた。それぞれバックから簡易食品を取り出す。300mlのゼリーは過不足なく必要な栄養を補給する事ができる。

サイレスは春菜とルナスサを手招きした。壁を叩くと、一箇所だけ微かだが音がする。

「春菜。ここに手をかざしてごらん」

春菜は言われた通りに手をかざした。光鱗が光を増し、扉が現れた。

「春菜で登録をしている。春菜以外の者が触っても反応することはない」

扉を開けると、細い階段が見える。

「ちょうど良い時間だ」

サイレスを先頭に階段を上がって行く。扉はルナスサが入ると自動的に閉まったようだ。すぐに広い部屋についた。部屋にはエアークバイクが3台とヘルメットが置かれていた。サイレスが一台に近づいたので、春菜は自分のバイクがどれかすぐに判断できた。

「私が乗れるエアークバイクを用意されるとは、ありがとうございます」

エアークバイクの重量制限は80から100kgである。小回りが効く為、第三部隊では奇襲・攪乱作戦の訓練に、第四部隊では救護・補給などの訓練でよく利用されている。

春菜はジャオイボックスで何度も乗っているが、実際に乗るのは初めてだ。ヘルメットをかぶると、喉が軽く締め付けられる。空気は横のフィルターからしか入ってこない。

春菜はゆっくりとエンジンをかけた。振動も使い方もジャオイボックスで学んだのと全く同じようだ。

「そろそろだ。私は先頭。次に春菜。そして、ルナスサだ。行くぞ」

サイレスの声が、耳元で聞こえた。緊張が走る。

サイレスが出口向ってアクセルをふかす。扉は自動で開いた。春菜も続く。5分間でどれだけ遠くにいけるかが、勝負だ。

外に出た瞬間。春菜は時が止まっているのかと思った。

視界は悪く。空気に流れが全くないからだ。春菜はサイレスに必

死について行く。まるで、それをあざ笑うかのようだった。

ヘルメットにはディスプレイがついていて、春菜は自分が今どこにいて、どの方向に進んでいるかが分かった。春菜は、経度、緯度の数字を確認することも忘れなかった。

春菜は慣れてくると、やはりシヨックだった。ゴミのためのような場所だ。シーワンが如何に恵まれているかを思い知らされる。ヘルメットを取ったら、死んでしまうのではないかとさえ感じる。人の気配を感じないが当然だ。

急に画面に3つの赤い点が現れた。距離はまだあるが、このまま行けば5分ほどで着くだろう。

「あれは？」

「人のようだ……」

サイレスの声には、疑惑が感じられる。

「こんなところに人がいるとは考えにくいですね。ここがどれだけ危険かGDで知らないものはいません」

ルナスサが応える。

「ああ……あのスピードは徒歩か？おかしいな」

すぐに黒い点表れた。赤い点に比べるとかなり大きい。

「暴獣に追われているようです。追いつかれるのも時間の問題でしょう」

春菜は背中がゾツとした。

「避けたいが、見過ごすわけには行かないな」

「春菜。私が前に出ます。ついてきて下さい」

「大丈夫です」

春菜の声は少し上ずっていた。

「足手まといにはなりません」

春菜の視界に暴獣が入ってきた。

「大きい……」

春菜は呟いた。

5メートルはあるだろう。

埃が激しく舞い上がり、ゆっくりと落ちて行く。その間から、ブニョブニョした鈍い光が動いていた。

うるこを持ったナメクジといった感じだろうか。触覚は、絶えず、短くなったり、長くなったりしていた。

「気持ち悪い……」

春菜は悪寒を感じた。

ブレーキを衝動的につかもうとした時、黒い点の正体のはっきり見えた。

「人だ！」

春菜は我に戻った。冷静に考える。

自分に今何ができるだろうか？

暴獣に追いかけられている3人を助けるべきか？だが、どうやって。エアーバイクの二人乗りは難しい。

暴獣を倒すべきか。どうやって。こっちは更に皆目検討もつかない。難しいことは、二人に任せよう。春菜は決めた。

「私がおとりになります」

春菜はアクセルを強く握る。それと同時に上昇キーを踏んだ。

「春菜。ちょっと待って……」

ルナスサの声が、はっきりと聞こえた。だが、春菜は止めるつもりはない。

春菜は得意の急上昇を行なった。通常の飛行は30cmから50cmの間で行なわれる。これ以上は、機体が不安定になるのだ。春菜はジャオイボックスでは10メートルまで挑戦した事がある。トモやソウタには怒られた。

春菜は暴獣の触覚付近まで上昇した。激しい揺れの中、標準を合わせ、エアーガンを触覚めがけて打ち込む。

命中。

春菜は、急いで方向転換した。下降中に急にしたた為、体が一瞬間に浮く。

暴獣は見かけから、愚鈍だと思っていたが、予想外に反応が早か

った。

春菜は反射的に、再度急上昇をする。

正解だった。

暴獣は口から液体を出した。

地面に落ちた液体は白い煙とともにゴミを溶かしたようだ。

春菜は、上下左右の動きを混ぜて、逃走を続けた。だいぶ離れただろう。次にどうやって、暴獣をまくか。

春菜は暴獣が一体何を頼りに自分を追っているか。考えることにした。

やはり動いているからだろうか。ならば動くのを止めれば、追いかけないだろうか。その可能性はあるが、危険な賭けだ。

「春菜。聞こえるか？」

「ハイ」

サイレスの声が聞こえた。春菜は咄嗟に上ずった声で返事をする。

「3、2、1、0といったら、急上昇し、急下降しながら、暴獣の背後に回れるか？」

春菜は、額が汗でぐっしより濡れていることに気づいた。

「できると思います。やってみます」

「よし。では、3、2、1、0」

春菜はアクセルを思いっきり握り、上昇キーをこれでもかというくらい、強く踏んだ。

「バイク頑張れ」

春菜は心で叫びながら、歯を食いしばる。

暴獣の頭がはつきり見えるところまで上昇すると、足を元の位置に戻し、ブレーキを一気に握る。

春菜のエアークバイクは、木の葉が落ちるように、回転しながら、落ちて行った。春菜は重圧に耐えながら、どうにか機体をコントロールし、暴獣の後ろにもぐりこむ。

春菜は必死で気づかなかったが、暴獣の動きは明らかに鈍くなっていた。

暴獣は春菜の動きに反応できなかった。見失ったと分かった、全身を震わせ、その場から動こうとしなかった。

暴獣から少し離れたところにサイレスがいた。

「何をされたのですか？」

サイレスの後ろを走りながら、春菜は聞いた。

「あれは、ナメクジなどの軟体動物とワニ、トカゲなどの爬虫類に過剰成長剤を投与し、突然変異で生まれた生物ではないかと推測したんだ。ナメクジは塩素に弱い。それを補う為に、鱗という発想をしたんだろう」

「それに、意味はあるんですか？」

「一見意味のない事を研究し、意味をもたらす事が、科学を発展させるのではないかな？特に、欠点を補い完璧に近づけていくという概念は科学の根本だろう」

「なるほど」

「ナメクジは、伸縮を繰り返して移動する。どんなに鱗が強固でも、そこは他より弱くなるだろう。そこにエアーガンを打ち込んでから、塩素濃度の高い成分を含ませた弾丸を撃ち込んだんだ」

「塩素……そんなものまで準備されていたのですか」

「塩素といえば、塩だが、塩は人間にとって必要不可欠だろ」

「……はい」

ノイズがひどくなった。

「サイレス様。一人負傷者がいます。27・53地点で待機しています」

「了解。急ごう」

「はい」

サイレスはスピードを上げた。春菜も続く。

無残に突き出したコンクリートの影にルナスサはいた。

春菜はエアーバイクを降りた。地面に足をつけると、足が一瞬地面にのめりこんだ。驚いて足もとに目をやると、目の荒い粉が敷き

詰められている。ゆっくり足を上げると、地面に靴の形が残っていた。

「砂だ。足を取られないよう気をつけなさい」

「これが砂か」

春菜は砂をはじめてみた。舗装されていない場所は初めてだった。ルナスサの横に茶色いローブをすっかりまとった3人がいた。一人は座っており、他の二人は守るように中腰である。

春菜は、3人に声を掛けた。

「怪我の具合を見てもよろしいですか？」

「すまない。頼む」

ローブから除く黒い瞳の男が言った。声は小さいが重量感がある。春菜は、かがんだ。座っている者は足を抱えている。

春菜はそつと左足を触った。すぐに分かった。

「折れていますね。これでは、動けません」

「そんなことは分かっている」

足が折れているにも関わらず、苦痛を感じさせない、明瞭な声が春菜の耳に届いた。春菜は思わず頭を上げる。

ヘルメット越しに、茶色の瞳と目があった。

「あんた、女か？」

好奇心を含んだ声の方を春菜は向いた。唯一ローブから見える心的特徴の青い瞳が春菜をみつめる。

「そうですが、何か問題でも？」

「いや、ちよつと驚いただけさ」

「貴方は元気そうですね。では、怪我をしている人をあの中に連れて行つて下さい」

春菜が指を指した方向にはすでに、6人が入るには十分の広さのテントが張られていた。テントは、大小の浄化フィルタースクエアを組み合わせて作られる。およそ1cmのヤスオーというボンベに入れて持ち運び、一つで最大5m四方の浄化フィルタースクエアを持ち運ぶことができる。

青い瞳の男が口笛を吹く。

「こりやすごいね。俺達は運が良い」

3人をとりあえずテントの中に入れると、春菜、サイレス、ルナスはテントの外で会話を交わした。

「彼らを助ける方向で良いのですか？」

「彼らが何者か分らないが、関わってしまった以上、放っておくわけにはいかない。予定外だが、今日はここで止まろう」

「了解しました」

春菜とルナスは頷いた。サイレスを先頭にテントの中に入る。テントは空気浄化フィルターで作られている為、ヘルメットをとる事ができる。

汗で、前髪が額にべっとりついていていた。春菜はそれを掻き揚げると、すぐに怪我人の治療に当たる。

サイレスは、春菜と怪我人をベッドのある個室に移動させ、そこで治療するよう言った。春菜は、エアバイクからとってきた、医療器具一式を広げた。

「申し訳ありませんが、服を切ります」

はさみを取り出し、服を切る。

折れた骨は皮膚を破り、出血していた。

ローブを脱いだ男は、春菜が思ったより若かった。顔色は怪我の為青白いが、目は力強く、表情からも苦痛は見えない。春菜は思わず、当たり前のことを聞いた。

「痛くありませんか？」

茶色い瞳の男は答えない。春菜は部分麻酔を打った。春菜は応急処置ではなく、完全な処置をするつもりだ。サイレスは最初、春菜と茶色い瞳の男の様子を見ていたが、春菜の手さばきを見て安心し、部屋の外に出た。

「名前を伺っても良いですか？私は春菜です」

「……名前か？私はリックだ」

「リックさんですか。痛かったり、不都合を感じたりした場合は、

遠慮なく言つて下さい」

「あんた達は、何者なんだ？」

「私たちですか？さあ、何者なんでしょう」

春菜は、礼儀を重んじている。礼儀を重んじない人間に対して、真つ向から批判はしないが、相手にもしない。

「まあ、いい。何者でも。助けてくれてありがとう」

「どういたしまして」

春菜は忙しく手を動かしている。わずか数ヶ月で身に着けたとは思えない正確な処置である。

春菜はそれを当然と感じている。シーワンでは誰もが当然出来ることだと感じている。しかし、実はそうではない。ネージユは春菜を重んじ、特別カリキュラムでスパルタ教育を行なっているのだ。

春菜は大きく息を吐き出した。

「終了」

リックは、点滴を受けながら規則正しい寝息を立てていた。春菜はリックに布団を掛け、部屋を出た。

5人が一斉に春菜の方を向いた。

「坊ちゃんの状態はどうなんだ」

青い瞳の男が春菜に近づいて聞いた。春菜は慣れたが、皆身長が高いな、と思った。首が疲れる。

「リックさんは、今寝ています。平気そうな顔をしていましたが、体力はかなり消耗しているでしょう。足の方は、全治3ヶ月です」

「3ヶ月か」。困ったな。こっちに頼れる場所がまだないんだよな」

青い瞳の男が、元氣なく呟いた。

彼の名前は、エドガーという。ロープを取ると金色の髪がこぼれ落ちている。端正な顔立ちは、サイレスに劣るが、人を惹きつけるに十分だった。声が明るい分、遊び人を思わせた。

黒い瞳の男は、リンという。短髪で体も締まっていて、軍人を思わせる。エドガーと対照的に落ち着いていた。

彼らの境遇をルナスサが説明してくれた。

エドガーとリンはリックのボディガードだという。リックはアルフォンス家の一人息子で大学生らしい。

アルフォンス家は5代前までは、GBの最高高級地域に豪邸を構える名家だった。それが、遊興にふけるようになり、遺産分与を重ね小さくなってしまった。

そして、平均の家庭並になった時に生まれたのが、リックの父親、アルフォンス・サムである。彼は、生まれながらに聡明で神童と呼ばれた。曲がった事が嫌いで実直な性格は、多くの人を惹きつける反面、煙たがられもした。年を重ねるごとに、後者が多くなっていた。

サムは、GAトップの第一大学（通称セントラル）を優秀な成績で卒業し、財務省に就職した。45歳で左部主計官に就任した。サムが、主計官として積極的に取り組んだのが、軍の予算大幅削減である。軍は支出をほとんど公開せず、財務省ですら何に使っているか、把握できていない。それにもかかわらず、軍への予算は毎年国庫の3%にあたる。

生真面目なサムは、暗黙の了解を黙認する事ができなかった。サムは、次々と降りて行く同僚を横目に、一人で完璧な資料を作成した。さらに、サムは、軍の不正を暴く重大な証拠を見つけてしまった。

それが、アルフォンス家悲劇の始まりだった。サムの血縁関係にあるものが、次々と不慮の事故で死んでしまったのだ。

サムの下に、消滅メッセージが届いた。消滅メッセージとは、一度見たら消滅して二度と見えなくなる電子メールのことである。

『見つけたものを表に出すな。それが漏れた時、お前は全てを失うだろう。一週間以内に抹消せよ』

サムは、妻と息子にボディガードをつけた。3日後、妻がこの世を去った。

サムは、資料を隠し、軍に一人乗り込んで行った。その帰り道、サムは事故で妻の後を5日遅れで追うことになった。

サムより、リックの安全を託されたエドガーとリンは、リックの身に危険が迫っている事を悟った。サムの隠した資料を持っているのは、リックであると仮定するのは、簡単なことだったからだ。

そして、最終的にブローカーに頼んでGDに逃げてきたのだった。

「この話が、本当なのですか？」

春菜はサイレスとルナスサの方を向いた。サイレスは頷いた。

「彼がアルフォンス・リックかは、分らないが、アルフォンス家の人間が、ここ半年で皆不可解な死を遂げたのは事実だ」

「そうですか」

春菜の表情は厳しかった。春菜は、GAで不条理な待遇を受けたことはない。すべて、実力の世界だった。実力のない者は無視され、ある者には、道が開かれる。それが、春菜が肌で感じたGAだった。軍に関わったことは、学校見学の時だけだが、感覚として信じられない。

「お嬢ちゃん、信じられないかい？」

エドガーが春菜に聞いた。

「申し遅れましたが、私の名前は春菜です。私には判断できません」
「信じてもらえなくても良いが、事実だ。だから、俺たちはここにいる」

リンが深刻な声で言った。

「我々には判断できない。リックの話を聞いてから、星輝殿に判断を仰ごう」

「あんたら、青藍の人なのか？」

「そうだが……」

サイレスの発言に春菜は一瞬驚き、表情に出そうになった。だが、ルナスサが全く動じていないのを見て、押さえる。

「そうかー。俺達がGDに来る時に協力してもらったのが、ナグーっていうやつなんだが、そいつが、俺達みたいにGD出身じゃないやつは、青藍に行くのが良いって言ってたんだ。だが、青藍つてもと軍人出のやつばかりだろ、信用できるか、ちょっと微妙なんだ

よな」

「青藍が軍と繋がっている可能性はない」

「そうかーそれなら、良いんだけどな。あんたら、青藍の人間ならGDの人間じゃないのか」

「答える必要はないな」

「でも、サイレスさん。あんた良い男だよな。俺、世界で一番男前って自負してたけど、あんたにや、負けるよ。嬢ちゃんも、目が大きくて可愛いし、GDも捨てたもんじゃないな。それにしても、ルナスサはでかいな。俺、巨人族は始めてみるんだよ。でかいけど、想像してたより、普通だな。仲良く出来そうでよかった。よかった」

エドガーは身振り手振りをつけて、話を続けた。

「俺もさー今までいろんなやばい橋渡ってきたからさー、いつかはGDに来ることになるだろうなって思ってたんだ。それが、いざ来てみると、やばい、やばい。想像以上だ。な、リン」

リンは黙って頷いた。

「空気は悪いし、怪獣はいるし、さすがに、これはやばいなと思ってたんだよ。でも、やっぱり、あれだな。拾う神あれば、救う神ありってやつだ。青藍にこんな早く接触できるとは思わなかった」

「おい、まだ、助けてもらえるかは分からないだぞ」

「リン、本当にお前は見る目がないな。この人たちは、優しい人たちだぞ。せつかく助けた俺達を、投げ出すなんてしないさ」

「おまえ、本当に楽道家だな」

「当たり前じゃ。なんで、自分から嫌なこと考えんといかんのじゃ。嫌なことは、起こったことだから仕方ない。先のことはいい事ばかりに決まっている」

エドガーは両手を突き出した。隣に座っていたリンが、思わず避けた。春菜は笑ってしまう。

「お、嬢ちゃん、笑った方が可愛いな」

「お世辞はいいですよ。エドガーさん良いと言いますね」

「言っておくが、俺は真実しか言わん。嬢ちゃんは可愛いぞ。世の中な、頭の良いやつほど、悪い方悪い方に物事を考えるんだ。サイレスさんはね、顔も良いが、頭も良い。深刻な顔も似合うから仕方ないが、考えすぎるタイプだぞ」

春菜はサイレスの顔を見た。苦笑いしている。

「エドガーの言う通りだな。今、青藍から返信があった。明日ここに迎えに来てくれるそうだ」

「本当か。ありがとう。ところで、いつの間にそんなことしてんだ。俺達が話している間、サイレスさんここにいただろ」

「企業秘密だ」

「そうか。まあいいや。本当にありがとう。坊ちゃんにも伝えたいが、まだ、坊ちゃん寝てるかな」

「いえ、そろそろ薬の効き目も切れます。目を覚ます頃でしょう」

「坊ちゃんの所に行ってもいいか？」

春菜はサイレスを見た。

「問題ない」

春菜が立ち上がると、エドガーとリンも立ち上がった。

治療室は、3人が入ると、少し窮屈だ。リックはちょうど目を覚ましたところだった。

「坊ちゃん。俺が分かりますか？」

「もちろんだ。エドガー、リン」

「そりゃ良かった。頭のほうは大丈夫みたいだな」

「おい、エドガー」

「うるさいな。リン。お前はもうちょっと、こう分かりやすい感情表現は出来ないのか？坊ちゃんが、まあ、怪我はしてるが、命に別状がない事を喜ばないなんて、人間として失格だぞ」

「リック坊ちゃんは、全快してるわけではないんだぞ。エドガーといるだけで疲れてしまうだろ」

「おい、どういう意味だ」

「おいおい。二人とも止めてくれ。自分の怪我の状況は分かっている

るつもりだ。大丈夫だ。それに、エドガーが深刻な顔をしたら、その方が回復に差し支えるよ」

リックは穏やかに言った。

「はあく、リック坊ちゃん。そうやってエドガーを甘やかさないで下さい。調子に乗りますから」

「リン。調子に乗るってどういう意味だよ。俺はいつだって坊ちゃんの事を考えてるんだぞ」

「そうか。それは気持ち悪いな。エドガーはいつも女の事ばかり考えてると思っていたよ」

「それは、ないですよ。坊ちゃん」

春菜は3人の話を聞きながら、考え込んでいた。なぜか、違和感のような腑に落ちない気持ちに心が広がったのだ。春菜の神妙な顔を見てリンが、低めのトーンで言う。

「春菜さん。何か、気になる点でもありますか？」

春菜は、下向き加減の顔を上げて、首を横に振った。

「いいえ。リックさんの状態は安定しています。今のところ、何の問題もありません。今後の移動もリックさんの体に負担がかからないように手配させてもらいます」

「ありがとうございます。ですが、表情が少し固いようですよ」

「確かにだ。嬢ちゃん。心配事なら隠し事はなしだぜ」

「本当に、問題はありません。私の顔は昔から、こんなんです」

「そうかい？分かった。嬢ちゃんも、物事を考えすぎる気があるんだろ。考えるより、なんかあれば、聞いたほうが、早いぜ。どうせ、俺達の事なんだろうから」

「エドガーすまない。ちよつと話が見えないんだが、今までの状況を聞いてもいいだろうか？」

「おう、そうだな」

春菜たちが青藍のメンバーである事など、最初はエドガーが話し始めたが、話が長くなり始めたので、リンが要点のみ端的にリックに伝えた。

「そうか。エドガーを信用してGDにきたが、實際来てみたら行き先もなく途方にくれていたんだ。本当に感謝します。ありがとう」
「いえ、とんでもないですよ。偶然通りかかって、見過ごせなかっただけです。体力は消耗していますから、休める時にしっかり休んでください」

春菜は、エドガーが話し始めると長くなる為、暗に遮った。

「そうですね。リック坊ちゃんもまだ休んだ方が良いでしょうし、エドガー出ましようか」

「そうか。もう少し話したいけどな、嬢ちゃんも言うし、仕方ないか」

エドガーは部屋を出て行く前に背伸びをした。天井に指がつく。

治療室には、春菜とリックが残った。

「点滴をしますが、何か注意すべき点がありますか？」

「ありがとう。特にない」

「そうですか。ではでは」

春菜はリックの腕を取った。

「春菜って呼んでもいいのかな？」

「どうぞ」

春菜は抑揚のない声で答える。

「春菜の目は死んでるね。まるで、GAの人間のようにだ」

リックの口は三日月のように端がつり上がっていた。春菜は、反応しないように注意深く、針を指した。

「そうですね？でも、青藍についてご存知なら、GDの人間でないことは、推測できると思いますけど、そういうことですか？」

「いや、僕はまだGDの人間に会った事はないから、やっぱり同じ人間変わらないんだなと思っただけさ」

「……よし、これで大丈夫。急ぐ必要もないので、ゆっくりにしています」

春菜は、リックの目に手をかざした。

「寝てください。寝ることは、今の貴方には必要です」

春菜がゆっくり呟くと、いつの間にかリックは規則正しい寝息を立て始めた。

春菜は、個人目覚ましを2時間後に合わせた。点滴が終る時間だ。それまでは、仮眠を取ろうと、椅子に座る。

「春菜。変わろう」

全く気配を感じさせず、サイレスが入ってきた。

「いえ、私は大丈夫です。サイレス様こそお休み下さい」

「私は大丈夫だ。手前の部屋をルナスサと春菜の部屋にしている」

「エドガーさんとリンさんは良いのですか？」

「特に監視する必要はないだろう。それに、変に警戒されても困るからな」

春菜は頷いた。

「分かりました。ありがとうございます。では、失礼します」

「ああ。お休み」

春菜は頭を下げた。

春菜が治療室を出ると、サイレスは、考え込むように座った。点滴を見つめながら、呟く。

「2時間程か……」

春菜は、さり気なくエドガーとリンの部屋を探ってから、ルナスサの待つ部屋に入った。

ルナスサは、床に静かに座っていた。春菜が部屋に入ると、笑顔で迎える。

「春菜。疲れましたか？」

「疲れてないと言いたい所だけれど、やっぱり疲れました」

「外は違うでしょう」

「テレビで見たことはあつたんですけど、実際に厳しい場所ですね」

「環境は厳しくなっていますが、技術の進歩で楽になりました」

「そうですね。このテントもすごいし」

春菜は壁を軽く叩いた。弾むような感覚が手に返ってくる。

ふと、春菜はため息をついた。

「春菜。どうかしましたか？」

「ちよつと、腑に落ちないところがありまして……」

「何ですか？」

「あの人たちの事情は本当なのでしょう？ アルフォンス家の話について私に本当か判断するだけの知識はないんです。だからなんとも言えないんですけど……」

「何が気になるんですか？」

「一番は、やはりリックさんですね。いいところのお坊ちゃんという感じは、話し方から分かります。でも、治療をさせてもらって、あまりにも鍛え抜かれた体なんですよ。無駄がないというか……。一体何者だろうと疑いたくなるくらいなんです。服を着ていたら、細身に見えます。だから、服を着ていたら、分からなかったと思うんですけど……」

「なるほど」

「サイレス様に言った方がいいでしょうか？」

「そうですね。でも、サイレス様もお気づきになるでしょう。おそらく、青藍の名前を出したのは、警戒感の表れもあると思います」

春菜は、理解したように頷いた。

「そういうことですか。本当でも嘘でも、まずは、青藍についてかということですね。さすが、先の先を読んでいる」

「春菜。そろそろ休みましょう。しっかり寝ないと、体も頭も役に立たなくなりますよ」

「そうですね。おやすみなさい」

「おやすみない。春菜」

春菜もルナスサもベッドにもぐりこんだ。春菜は今日一日の事を考え始めたが、すぐに深い眠りに着いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6019a/>

サイデリアル～光り輝く者たち～

2010年10月9日05時18分発行